

筑波研究学園都市における主婦の生活行動 — 並木・上大角豆地区を事例として —

高橋 伸夫・中村 理恵

I 序論	III 上大角豆地区における主婦の生活行動
I-1 従来の研究と研究目的	III-1 生活行動の事例
I-2 研究方法	III-2 各種生活行動の特徴とその変容
I-3 調査対象地域の概観	III-3 生活行動のリズム
II 並木地区における主婦の生活行動	IV 並木地区と上大角豆地区における主婦の生活行動の特性
II-1 生活行動の事例	IV-1 各種生活行動からみた特性
II-2 各種生活行動の特徴とその変容	IV-2 生活行動のリズムからみた特性
II-3 生活行動のリズム	V 結論

I 序 論

I-1 従来の研究と研究目的

人間が日々生活を営む限り、人間は時空間において存在する。人間がある時間・ある空間に存在するという事は、時空間資源、つまり時間と空間を消費することを意味する。従って人間の行動に着目し、時空間資源の利用形態を見ることにより、個人の行動のみならず、個人間や人間と環境との相互関係を理解することが可能となる。

個人を取り巻く自然と社会とを一元的な共存過程として把握しようとしたのが、Hägerstrand の提唱した時空間地理学であった。これは人間の生活行動 (path) にかかわる外的な制約条件からみようとする一般的特徴を持つ。

時間地理学の枠組みは、特定の時間・空間スケールにのみ限定されるものではない。最初にこの考え方を直接的に利用した研究としては、すでに櫛谷 (1985) が述べたように、Lenntop (1970) の PESASP が挙げられる。これは都市内、ある地域の与えられた時空間条件下での、人々の 1 日の典型的な活動プログラムの実行可能性を検定したものであった。この種の研究は、1980年代になってもしばしばなされている。例えば Forstrom (1984) などである。しかし、これらの研究はHägerstrand のいう制約条件のうち、能力の制約のみに焦点をおいた一種の物理主義的アプローチであった。これらは、時間地理学の包括する分野のうち、地域科学という一部の分野であったといえる。このような狭い範囲に限定されない関心を反映して、これまでにさまざまな実証研究がなされている。また、これらの研究に対する展望には、Kellerman (1980)、Parks 及び Thrift (1980)、Pred (1973, 1977)、及び Thrift (1977) らによって行われている。

わが国の時間地理学を用いた実践研究は少ない。その中で高橋・市南・伊藤（1982）は、生活行動の時空間的な軌跡を家族単位で追跡し、出島村住民の生活行動を分析した。そして、居住地を中心として展開する三重の生活行動圏を明らかにしている。この研究は人間行動そのものに焦点をあて、人間が形成するさまざまな組織の空間的・階層的特性を地表面へ投影した点で意義深い。

また、櫛谷（1984）は時間地理学の動向を展望した上で、時間地理学における制約の概念を導入して、個人の日々における空間的行動の合理的解釈を試みた。これは、漁師の漁行動を時間地理学の制約の概念を導入して解釈を試みたという点で意義深い。しかし、生活空間の構造把握を目的としている前者の研究に対して、後者の研究は行動解釈を目的としている点が大きく異なる。

わが国においてはその他、都市住民の日常生活行動パターンをパーソントリップデータに基づいて把握し、その規定要因を考察した若林（1984）の研究がある。しかし、時空間レベルでの考察はなされていない。また、神谷（1984）は消費者行動を制約の概念を導入して分析した。しかし、本論は行動を連続的でなく、消費者行動のみにとどまっている。

わが国では、数少ないが女性の生活行動を論じた既往の論文がある。神谷（1987）は、time-geography のプロジェクト概念を導入し、主婦の日常行動の構造の把握を目的とした分析を行った。神谷は、外出行動を理解するには1日全体の活動の把握が不可欠であるという観点に立ち、1日を単位とする時間配分を分析の基礎におき、まず、主婦の1日の時間配分の類型化を行い、各類型の特徴を明らかにした。また、神谷ら（1990）は、生産と消費を含む日常生活全体を、時間地理学的アプローチによって、統一的に考察しようと試み、既婚女性の社会進出という現代社会の問題の1つに対して時間地理学の立場から分析を試みた。

本研究では、これらに基づいて、Hägerstrand の初期の概念に注目し、人間の行動を時空間レベルでとらえることを試み、制約の概念を導入して、個人を取り巻く周囲の環境との相互関係を考察する。

さて、生活行動をとらえる研究は、地域的にみると、都市部と農村部とに大きく分かれている。前者の例では例えば高橋・高林（1978）の浜松市における余暇圏の研究や高橋ら（1984）の鉾田町における住民の行動圏をとらえた研究のほか、若干の研究が挙げられる。後者の研究例は少ないが、例えば、前出の高橋ら（1981, 1982）の出島村における研究が挙げられる。しかし新都市の生活行動を分析した研究は、今までに地理学の分野では見られない。

本研究ではこの点に着目し、研究対象地域を新都市である筑波研究学園都市にとり、新都市と旧来からの既存地区との地域差を考察するために、新旧両居住地区が隣接する並木・上大角豆地区を事例地区に取り上げた。

筑波研究学園都市は、国によって計画的に建設された研究・教育機関の都市であり、研究者主導型の都市といえる。しかし、そこに家族が形成されて居住空間が存在する限り、主婦の存在は無視できない。本研究ではこの考え方に立ち、対象を主婦に限定した。

以上を基に、本研究においては、新都市である筑波研究学園都市の並木地区と、隣接する既存集落の上大角豆地区に居住する、主婦の時空間レベルでの生活行動を通して、その生活行動空間の違いを明らかにする。また、行動空間の違いにとどまらず、制約の概念を導入して、主婦を取り巻く周囲と

の相互関係を理解することも目的とする。その際、対象地域が新都市であることから、生活環境の急激な変化に伴う生活行動の変化も考察の対象とする。

I-2 研究方法

研究方法として、主婦の生活行動を把握するため、聞き取り調査を行った。調査は1986年5月から11月に行い、生活行動の事例を収集した。その際、時空間的考察が可能となるように、時間と空間の両方についての行動が記述できるように考慮した。なお、聞き取りに当たっては、主婦として考えられる属性によって分類し、その作業仮説を基に行った。

前述の新都市という急激な住環境の変化を合わせて考察するために、調査時点である1986年の生活行動とともに、研究学園都市が建設され、住宅地区に移転が開始されて1年後の1976年における生活行動を取り上げた。これは、研究学園都市がまだ都市として十分に機能していない時期であると考えたためである。

調査の際は、極力プライバシーに関する事項は触れないよう留意した。また、基礎的な必要な資料を役場や公民館等で収集した。

生活行動の事例として取り上げた日は、原則として調査日の前日（週日）と、調査日に最も近い週末（休日）である。

次に、事例に表れないような行動を考察するために、生活行動を各種の行動目的ごとに分類し、それぞれについて聞き取りを行った。生活行動の分類は、桑田・伊藤・大竹（1977）による分類を採用し、その中で移動を伴う行動を取り上げる（第1図）。各種生活行動について1976年当時の聞き取りを行った。

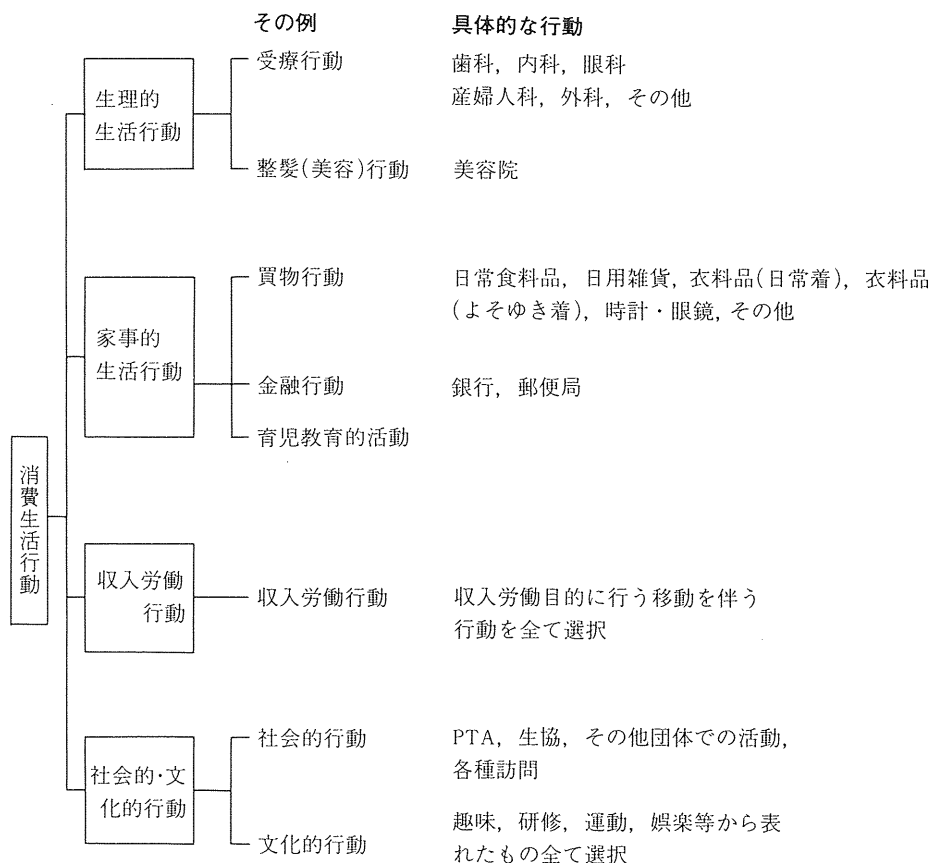
次に、週日・週末の時空間で示された事例を、Carlstein（1977）によるCategory Spaceを導入し、上述の各種行動目的ごとの機能的なpathにすることにより、生活行動空間の分析を行った。そして、Hägerstrandによる制約の概念を援用することにより、並木・上大角豆両地区における生活行動の差異を地理的環境との相互関係から明らかにすることを試みた。

I-3 研究対象地域の概観

筑波研究学園都市は、東京の北西50～60kmに位置し、茨城県つくば市及び稲敷郡茎崎町にまたがる¹⁾。筑波研究学園都市の全域面積は28,560haであり²⁾、「研究学園地区」³⁾の2,696haと、「周辺開発地区」⁴⁾に分けられる（第2図）。本論では、前者を学園地区、後者を既存地区、合わせて学園都市と呼ぶことにする。

学園都市は、国立研究機関や大学の移転・建設を中心に新都市を建設し、首都圏の人口過密解消を計ることを目的として、1963年に建設が閣議決定された。学園都市の建設に関する概要を第1表に示した。建設前の土地利用は、山林56%、畑41%⁵⁾であった。

つくば市は、1987年11月30日に筑波郡大穂町・豊里町・谷田部町・新治郡桜村の3町1村が合併し、翌1988年1月30日に筑波郡筑波町が加わり誕生した。



注)消費生活行動を4分することは、伊藤セツら(1984):『生活時間』光生館, 40~49.による。

注)具体的な行動は、月1回以上の頻度を持つものに限定する。

第1図 各種生活行動の分類基準

第2表に示したように、学園都市建設により、6町村の人口は、1970年10月1日現在78,110であったが、1990年1月1日現在168,465と2.2倍に増加した。中でも旧桜村は、人口は1970年の9,452から1985年の38,018へと4.02倍に増加し、当時人口数では全国1の村であった。本研究における学園地区内の並木地区も、旧桜村に属している。旧桜村においては既存地区の人口も増加しているが、学園地区の人口が学園都市の全人口の約3分の2を占める。

学園都市が他の新都市と区別される点は、土地利用に関して「線引き」され、法制的な規制によって周辺の農村における無秩序な都市化を防ぐことを前提としたことである⁶⁾。学園地区の居住地は、人口集中地区として限られた範囲に定められ、国立研究教育機関の職員とその家族、及び学生の居住を目的としていた。

本研究においては、学園都市のこれらの特色に注目し、第3図に示した学園地区内人口集中地区の1つである並木地区と、居住地区が道路一本で隣接する上大角豆集落を取り上げた。

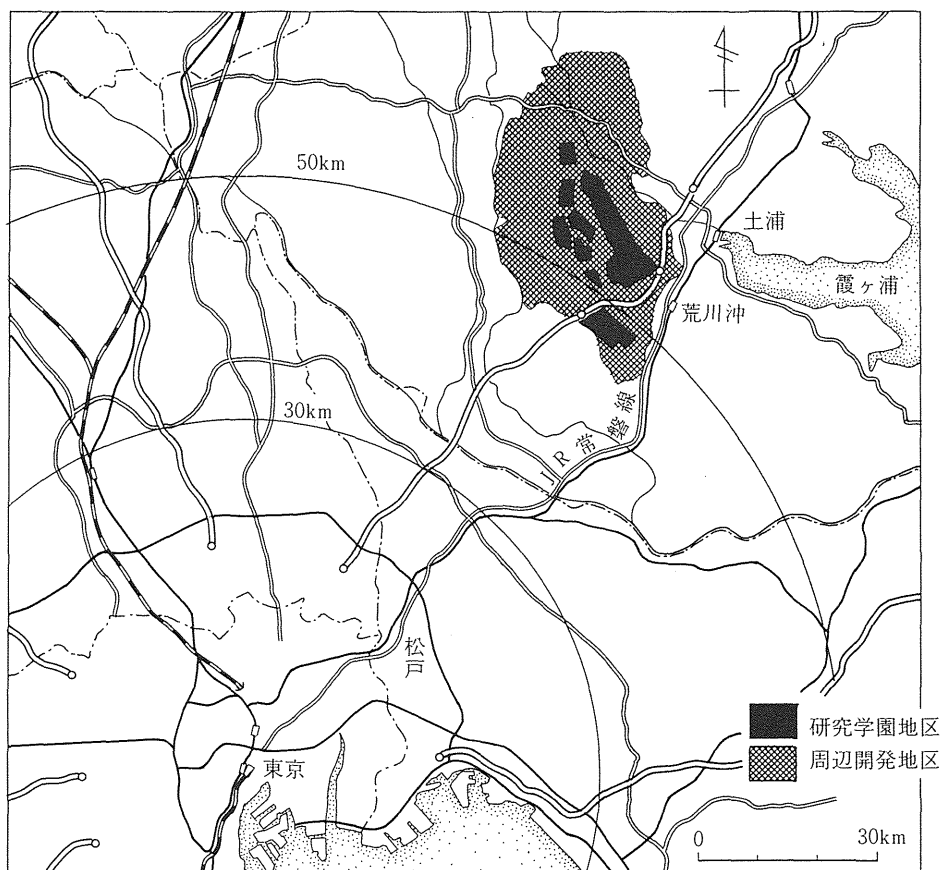


図2 筑波研究学園都市の位置

第3表に示したように、上大角豆集落は、筑波・稲敷台地を流れる花室川沿いの段丘の下位面に位置し、西側を学園地区に接する人口235、世帯数52戸（1985年9月現在⁷⁾）、農家数33戸⁸⁾の集落である。1970年と比較すると人口はほぼ停滞しており、世帯数は転入により増加している。

第2種兼業農家は増加傾向にあり、1985年1月1日現在で25戸ある。第4図に示したように、保有耕地面積は、1985年には約41.5haで⁹⁾、畑25.8ha、田13.1ha、樹園地2.6haあり、1戸当たりでは、1.26haの所有となる。畑では最近10年ほど夏ネギ栽培が主で、麦も栽培される。農地、山林とも減少傾向にある¹⁰⁾。なお、研究学園都市建設後8戸が集落へ転入し¹¹⁾、1977年に行政区の第1班～第4班に加え、第5班が組織された。

本研究においては、学園地区内人口集中地区である並木地区と、既存集落である上大角豆地区を研究対象とするため、既存集落へ転入した新住民および、学園地区内へ転入した旧住民については、調査対象からは除いた。

第1表 研究学園地区及び上大角豆地区の生活に関する年表

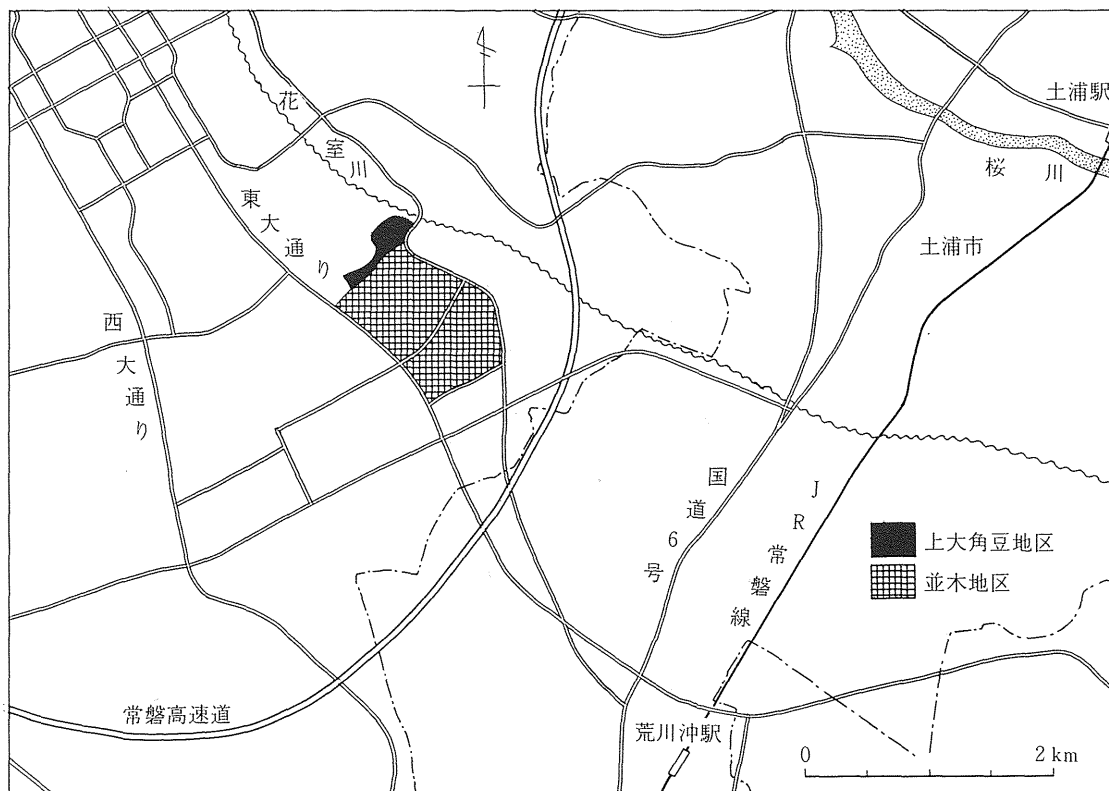
年	国立研究機関設置の状況	学 園 地 区	上 大 角 豆 地 区
1971		公務員宿舍等入居者対策協議会発足	花室川河川改修
72	無機材研移転	新住民花室地区入居開始 桜村立(桜中、九重小)転入開始	
73	筑波大学開学	土浦学園線の開道 常陽銀行学園都市支店(現竹園s.c.内)開所 土浦－竹園バス開通	
74		竹園東小学校、幼稚園、中学校 開校 竹園ショッピングセンター開所 竹園郵便局開局	
75		並木住宅入居開始 大角豆－高エネ研バス開所 東大通り開道 竹園s.c.内竹園クリーニング開院 並木子供会発足	
76	高エネルギー研開所式 金属材料研完成 筑波大学医学専門学群新設	大学会館完成 松見公園完成 筑波大病院患者受け入れ開始 天久保、並木ショッピングセンター開店	
77	国立教育研完成 防災センター移転 植物ウィルスセンター移転 果樹試験場移転 研究交流センター開所 霊鳥類センター、熱帯研移転 農業土木試験場、蚕糸試験場移転	桜村立並木幼稚園、保育園、児童館開所 並木診療所、郵便局開設 洞峰公園、テニスコート開放 荒川沖－筑波大バス開通 関東銀行並木出張所開所 竹園サブセンターに眼科、歯科開院 研究所、村、民間にテニスコート続々出来る	行政区第5班新設 集落センターの建設 天神社改築
78	林業試験場移転 予防衛生研開所	桜村立並木小開校 二宮公園オープン 並木－土浦バス開通 洞峰、赤塚緑道完成 並木大橋完成 竹園、並木公民館開館	
79	筑波研究学園都市概成 図書館情報大学開校 全機関移転終了	県立竹園高校開校 桜村立並木中、吾妻小、桜南幼稚園 吾妻保育所、児童館 開校開所	天神社脇に広場完成
80		桜村立西公民館開館 洞峰公園内に省エネルギー室内プール完成 歯科医誘致運動 各公民館に住民課出張 大型スーパー「カスミ」学園店開店 歯科医院続々開院	大杉ばやし保存会発足 老人会発足
81		並木ショッピングセンターの拡大 図書館情報大学 公開図書館オープン	
82		常磐線高速道(谷田部－千代田、石岡間)開通 耳鼻科誘致運動	
83		学園センタービルオープン 吾妻公民館開館	
84		県立並木高校開校	天神社改築
85		筑波研究学園都市ショッピングセンター ダイエー、西武、ジャスコ開店 筑波メディカルセンター開院 耳鼻科医院 工技院内に開院	上大角豆地区内横田家民家 学園内に移築、保存される

(旧桜村資料より作成)

第2表 研究学園都市町村別世帯数及び人口の推移

		1970年	1975年	1980年	1985年	つくば市 143,396 47,814
筑波町	人口	21,308	12,011	22,552	22,793	
	世帯数	4,859	5,186	5,398	5,529	
大穂町	人口	10,856	11,253	12,608	13,318	
	世帯数	2,405	2,563	3,364	3,463	
豊里町	人口	10,409	10,898	11,469	12,137	
	世帯数	2,277	2,417	2,576	2,833	
谷田部	人口	20,134	22,225	28,939	35,344	
	世帯数	4,472	5,102	8,541	11,462	
桜村	人口	9,452	14,531	33,561	38,018	
	世帯数	2,036	5,088	14,841	16,180	
荃崎町	人口	6,461	8,390	17,050	22,395	
	世帯数	1,351	1,946	4,344	5,853	
合 計	人口	78,110	90,429	126,179	144,005	
	世帯数	17,535	22,501	39,064	45,320	

(国勢調査報告より作成)

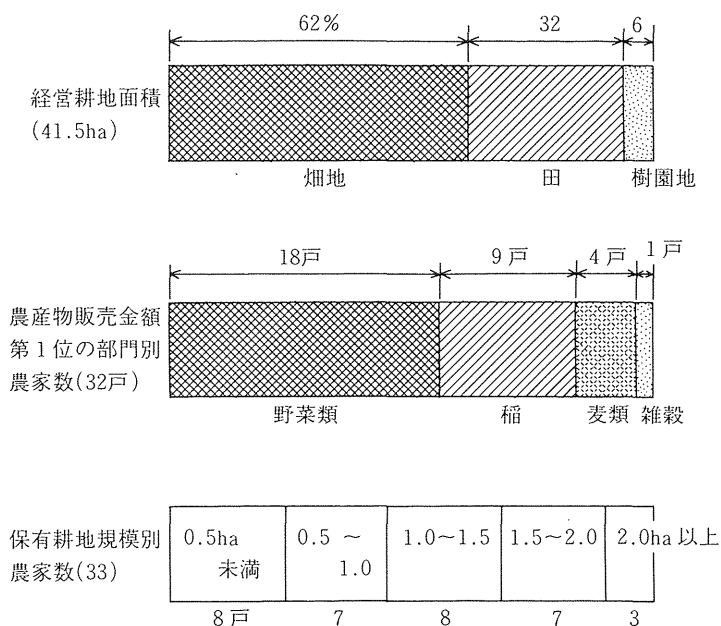


第3図 研究対象地域の概観

第3表 上大角豆集落の人口、世帯数及び農家数

		1975年		1980年		1985年	
		上大角豆	桜村	上大角豆	桜村	上大角豆	桜村
人口(人)		225	14,531	228	33,561	230	38,231
世帯数(戸)		48	5,088	49	14,841	51	16,223
農家数	専業	9	255	8	117	3	98
	第1種兼業	18	471	19	334	25	266
	第2種兼業	12	615	19	740	25	792
	合計	39	1,341	33	1,251	33	1,156

(人口、世帯数のうち1975、80年は都市計画基礎調査、1985年は住民基本台帳、農業数は1975年、1980年、1985年の農林業センサスより作成)



第4図 上大角豆集落の農業経営(1985年)
(農林業センサスにより作成)

Ⅱ 並木地区における主婦の生活行動

Ⅱ-1 生活行動の事例

本節で対象とした主婦は、子供によって行動が規定されるとの予想に基づき、作業仮説により、子供のいない主婦、就学前の子供を持つ主婦、就学後の子供を持つ主婦に分類する。

1) 子供のいない主婦の場合

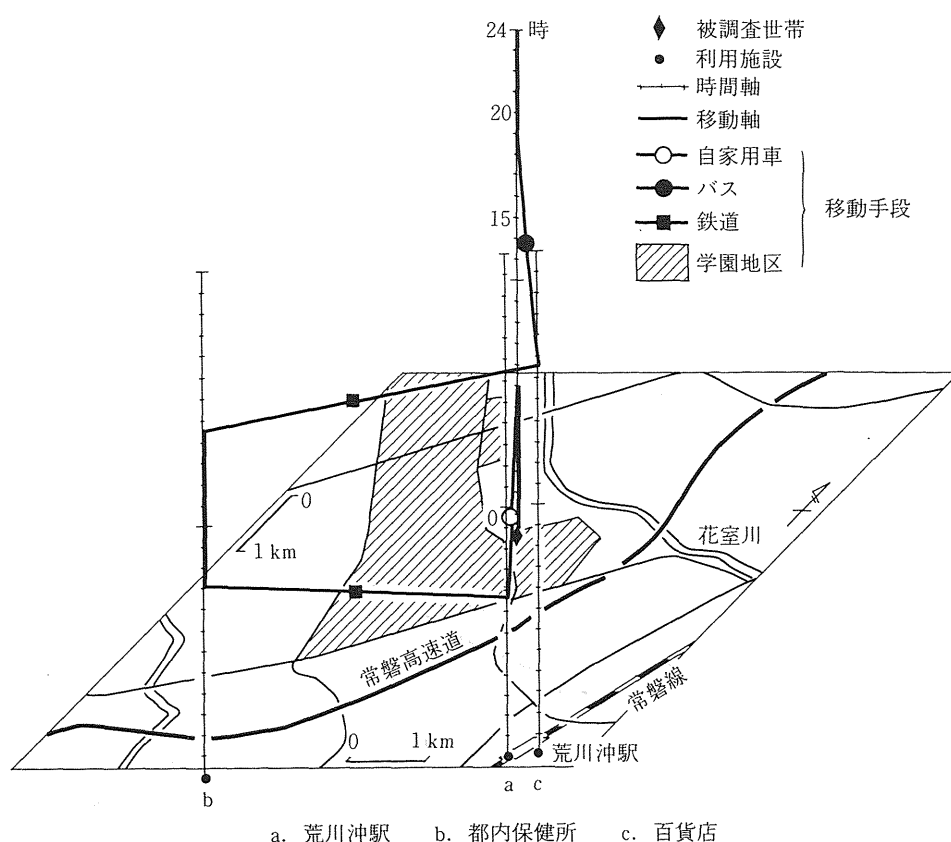
Aさんは、1984年12月の結婚以来、当地に居住している。1986年5月現在で、夫(34歳)、本人(32

歳)の2人暮らしである。Aさんは、結婚前より勤めていた東京都内の保健所に、年間約80日間通勤している。そのために、仕事のある週日と、仕事のない週日及び週末で生活行動は大きく異なる。自家用車を1台所有し、Aさんも運転免許を有している。以下に、Aさんの週日(仕事のある日)として、1986年5月26日(金曜日)の生活行動を記述する(第5図)。

まず、7時15分に夫の運転する自家用車で常磐線荒川沖駅(a)に向い、7時25分に駅に到着した。7時26分発の列車で上野駅まで行き、都内を鉄道及び徒歩で移動し、9時15分に職場(b)に到着した。16時30分に勤務を終え、17時30分上野駅発の列車で荒川沖駅へ向かった。18時35分に荒川沖駅(a)に到着し、駅前の百貨店(c)で食料品を購入した後、18時45分発のバスで自宅へ向い、19時に帰宅した。

仕事のある日は通勤に往復4時間を要するため、勤務時間の7時間と合計し、1回の移動で11時間を要する。従って、仕事のある日は自宅・東京間の1回の移動で、日常食料品の買物も勤務帰りの荒川沖駅で済ませることが多い。

食料品購入のための移動はほぼこれのみである。その他の生鮮食料品は、週1回並木地区駐車場を巡回する東茨城郡大洗町からの生協の鮮魚移動販売車、毎日学園都市周辺の既存集落や石岡市から訪



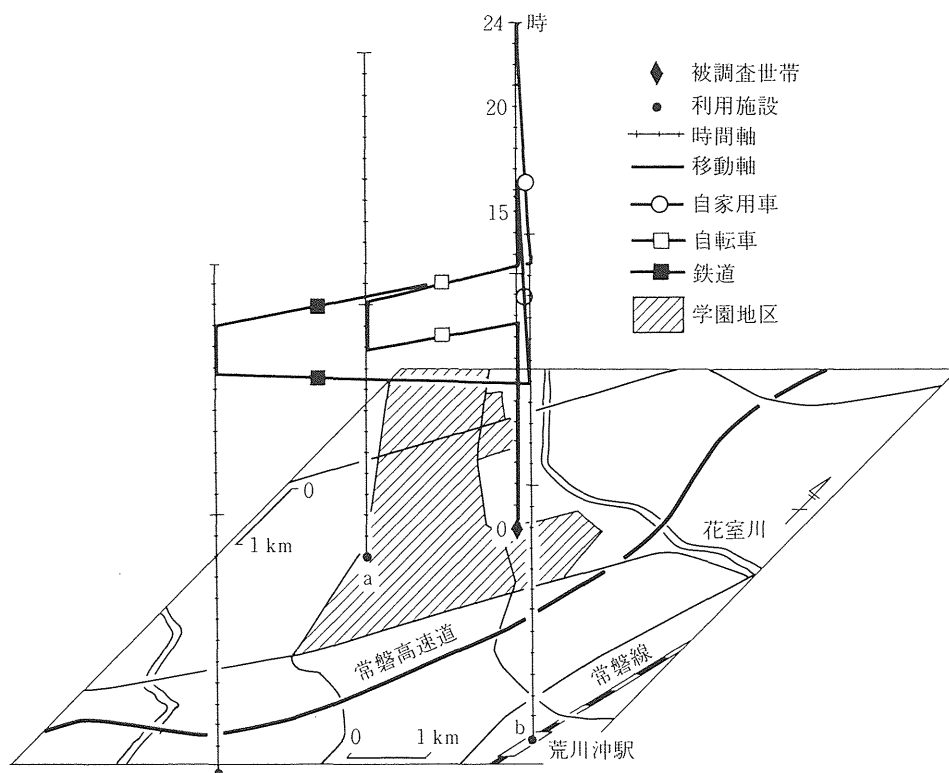
第5図 Aさん(子供のいない主婦)の週日の生活行動
(1986年5月の聞き取りによる)

れる野菜の移動販売車及び土浦市から訪れる豆腐売りから、保存食品は生協で購入している。並木地区の主婦は、移動販売車・生協を頻繁に利用する。

仕事の無い日は家にいることが多い。しかし、水泳サークルに参加するため、隔週の火曜日には自宅より1.6km離れた公園のプールに行く。また、月1回火曜日に仕事に関連した研修会へ赴く。以下は、仕事の無い週日で上述の2つの活動を行なった日の生活行動である（第6図）。

Aさんは当日、9時50分に自転車で公園プール(a)に向かった。10時に到着し、12時まで水泳をした。12時20分に公園を出て、12時30分に帰宅した。昼食後、16時30分に夫の運転する自家用車で荒川沖駅(b)に行き、16時45分発の列車で上野駅に向かった。都内を鉄道と徒歩で移動し、18時30分に文京区本郷の目的地(c)に到着した。19時より20時30分まで研修をした後、21時10分上野駅発の列車に乗り、22時30分に荒川沖駅(b)に到着した。夫に荒川沖駅まで自家用車で出迎えてもらい、22時40分に帰宅した。

このように週日に遠距離の移動を行なうため、週末は1日自宅に滞留することが多い。ただし、自宅に友人を招いて料理を教えたり、編物を習うというように、並木地区内の近隣の住宅との往来は行なう。



a. 公園プール b. 荒川沖駅 c. 都内喫茶店

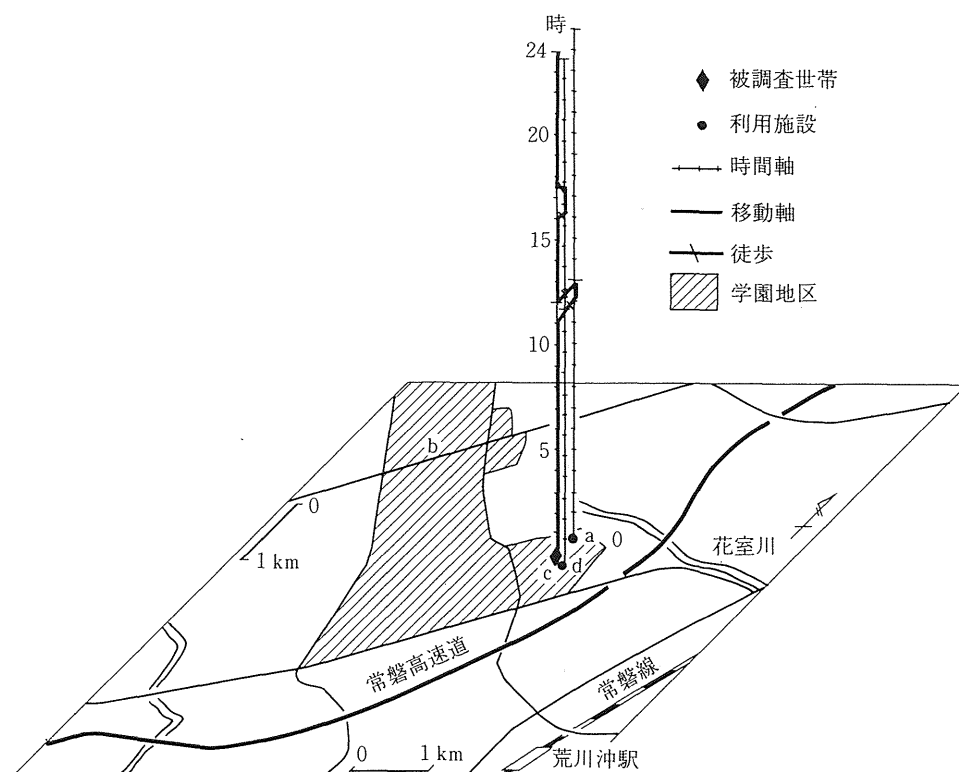
第6図 Aさん(子供のいない主婦)の週日の生活行動
(1986年5月の聞き取りによる)

2) 就学前の子供を持つ主婦の場合

a. Bさん(乳児を持つ主婦)

Bさんは、1983年10月に結婚のために当地に居住し始め、1986年9月現在、夫(33歳)、本人(31歳)、長女(0歳)の3人家族である。結婚のために仕事をやめ、現在は専業主婦である。自家用車を1台所有し、Bさんも運転免許を有している。以下にBさんの週日として、1986年9月12日(金曜日)の生活行動を記述する(第7図)。

Bさんは、8時に起床、朝食や洗濯、掃除などが一段落ついた11時に子供を連れて徒歩3分ほどの公園(a)へ散歩に出かけた。この時間帯の公園には、同じ年齢の子供を連れた主婦が集まり、子供を遊ばせたり、会話を楽しむ。12時には自宅に戻り、昼食を1時間かけてとった。子供に食べさせながら、合間に自分も食べるため、食事には1時間程かかる。13～15時まで、午前中にできなかった掃除を終え、15～16時までは休息していた。その後、16時10分頃から17時20分まで、子供と一緒に自宅の近所で他の子供達と遊んで、自宅に戻ってから18時30分まで夕食の用意をしながら子供の相手をした。18時30分から19時まで子供を入浴させた後、子供とともに食事をとり、22時に子供が寝つくまで



a. 公園 b. 吾妻公民館 c. 並木公民館 d. 桜南テニスコート

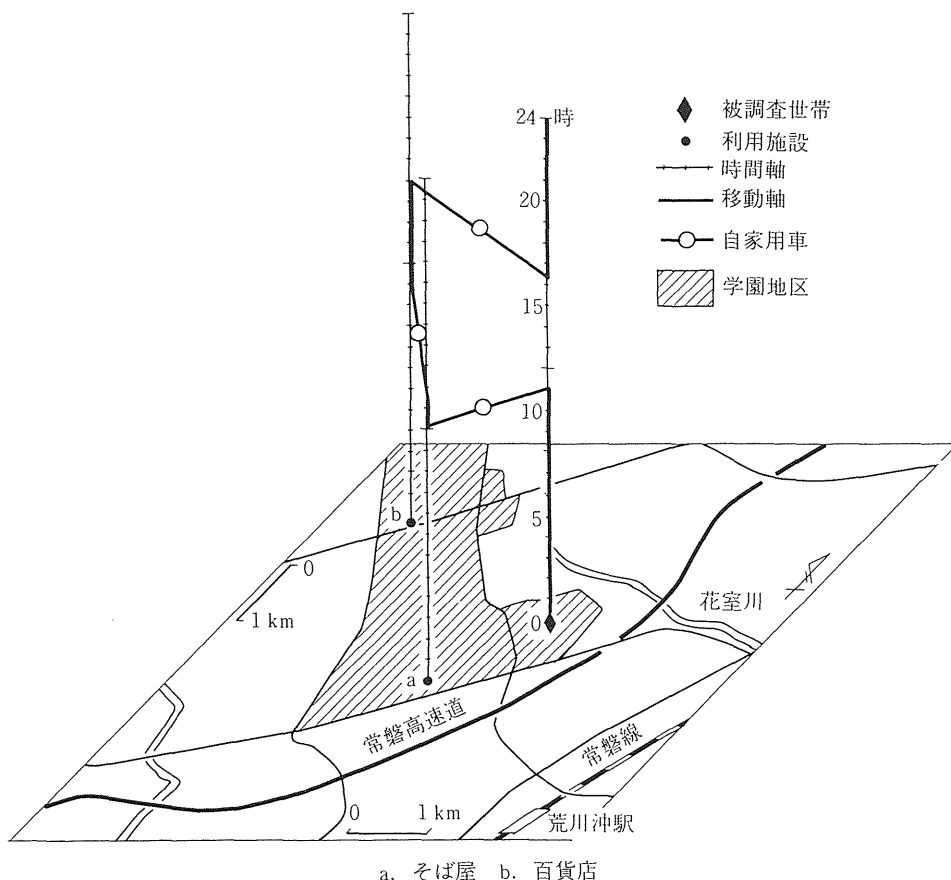
第7図 Bさん(乳児を持つ主婦)の週日の生活行動
(1986年9月の聞き取りによる)

相手をしていた。23時に出張から夫が帰宅した。夫はすでに食事を済ませていたので、その日は23時30分に就寝した。この日の行動は週日の一般的な生活行動といえる。

週日は夫が自家用車を通勤に利用するため、移動手段は徒歩が主で、ほとんど子供と一緒にいる。このように子供がまだ小さいため、1日の大部分は育児的行動に費やされ、移動範囲も移動時間も極めて限られている。

次に、調査日に最も近かった週末（日曜日）について述べる（第8図）。この日は、11時から家族3人で自宅を自家用車で出発した。11時10分からは谷田部町梅園にあるそば屋(a)で食事をとり、12時10分に自宅より約4.1kmの百貨店(b)に向かった。12時25分に到着し、16時まで買物をした後、16時25分に帰宅した。家族一緒にの外出が余暇活動であった。

日曜日は夫が家にいるため、自家用車を主な移動手段として利用し、必要に応じて家族で外出する。しかし、週末も週日と同様に、子供の体調によって外出する時間を調整する必要がある。外出時間は平均して1～2時間に制限される。事例として取り上げた日曜日は子供の体調がよく、天候も穏やか



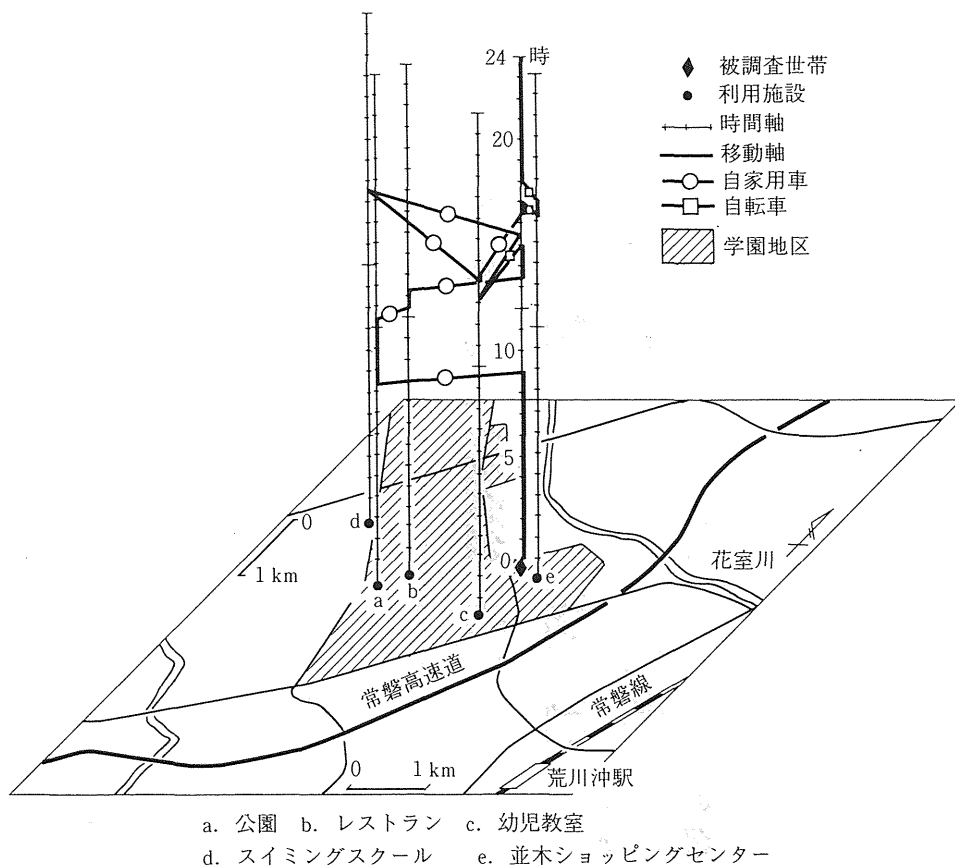
第8図 Bさん(乳児を持つ主婦)の週末の生活行動
(1986年9月の聞き取りによる)

であったために、通常より長めの外出が可能であった。

出産以前のBさんの生活行動は、第7図とは大きく異なり、4つの定期的活動によって週日の生活行動が規定されていた。まず、毎月第1・第3金曜日の9～12時まで書道を教えるために、自宅より3.1km離れた学園地区中心部の吾妻公民館(b)にバスで出かけ、第1・第4火曜日の10～17時までの自分の都合の良い時間には、徒歩1分ほどの距離にある並木公民館(c)で茶道を習い、毎週土曜日8時30分から10時30分まで、自転車で5分ほどの桜南テニスコート(d)で友人とテニスをした。また、各週火曜日の10～12時まで吾妻公民館(b)でちぎり絵を習っていた。週末は、柏や東京に買物に行ったり、筑波山や烏山などに遊びに行くことも多かった。出産以前のBさんの生活行動は、このように広範囲であった。

b. Cさん（幼稚園児を持つ主婦）

Cさんは1979年10月に結婚後、当地に居住し始め、1986年6月現在、夫（47歳）、本人（39歳）、長男（7歳）、次男（5歳）の4人家族である。CさんもBさんと同様の専業主婦である。自家用車を1台所有し、Cさんも運転免許を有する。

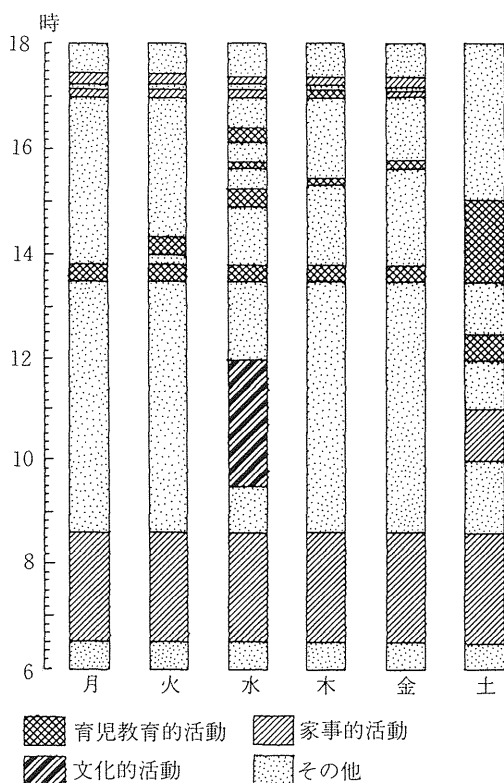


第9図 Cさん(幼稚園児童を持つ主婦)の週日の生活行動
(1986年6月の聞き取りによる)

以下に、Cさんの週日として、1986年6月4日（水曜日）の生活行動を記述する（第9図）。

Cさんは当日、9時5分に自家用車で洞峰公園(a)内のテニスコートに向かった。9時15分から12時まで友人とテニスをした後、12時20分に公園を出発し、洞峰公園近くのレストラン(b)に12時23分に到着した。そこで食事をした後、13時30分に帰宅した。テニスは、週1回この時間に行なっている。15時に次男を自転車で桜村梅園住宅内の幼児教室(c)に送り、15時15分に自宅に戻った後、すぐに長男をスイミングスクール(d)まで自家用車で送った。15時25分に到着し、そのまますぐに幼児教室(c)に向かい、15時35分から16時15分までそこに滞留した。その後、次男を連れて16時25分に帰宅した。17時に近所に移動販売車が訪れたので買物に出た。17時15分に買物のために自転車で並木ショッピングセンターに向かった。17時20分から18時まで買物をし、18時5分に帰宅した。

事例として取り上げた日は、月～土曜日の中でも最も移動の多い日であった。Cさんの月～土曜日の生活行動を規定している活動は、以下の通りである（第10図）。週日において共通していることは、夫と子供が通勤・通学する前の起床から8時40分頃までの時間と、夕方、移動販売車や並木ショッピングセンターで買物をする時間が家事的行動として制約を受けることである。ただし、土曜日は10～11時の間に買物をする事が多い。また、月～金曜日まで共通しているのは、13時30分頃に次男が幼稚園から帰宅するため、その時間には在宅していなければならないことである。その他、火曜日は、

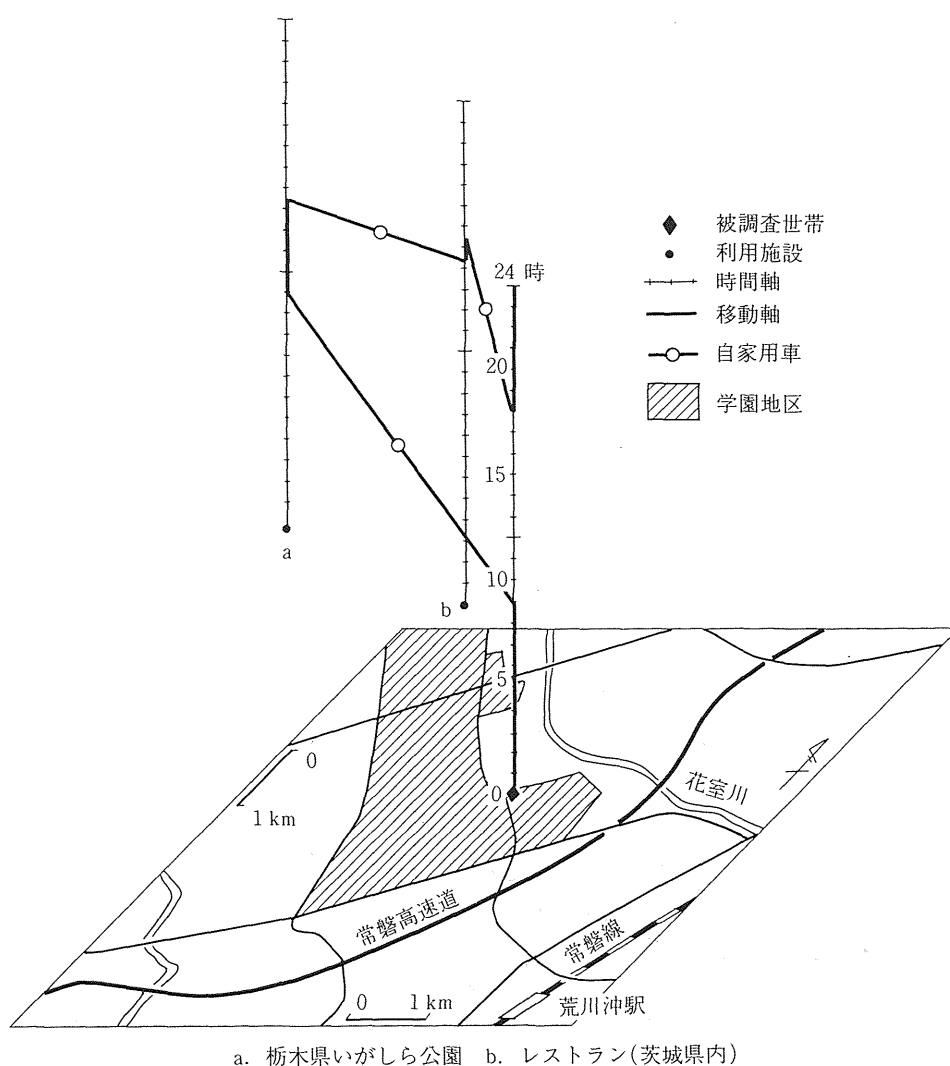


第10図 Cさんの月～土曜日のタイムスケジュール
(1986年6月の聞き取りによる)

14時に公園プールに行く長男を近所の母親が当番で送迎する車まで見送ること、水曜日は長男と次男の習い事が重なり、最も忙しく、木曜日は次男、金曜日は長男の習い事のためにそれぞれ制約を受けることである。これらの移動は自宅近くの駐車場までと距離は短い、これらの活動のために週日午後のその他の行動は著しく制限されている。

それに対して、月～金曜日の子供が幼稚園から帰宅する13時30分までは、行動を制約する活動はなく、事例にみられたように比較的長距離の移動や滞留時間を伴う定期的活動を行なうことも可能である。なお、子供が週日より1時間ほど早く帰宅する土曜日は、週日に比べて午前中が家事的行動により制約を受け、午後からは家族単位での行動を行なう。

次に、週末の事例として1986年6月1日（日曜日）の生活行動を以下に記述する（第11図）。この



第11図 Cさん(幼稚園児を持つ主婦)の週末の生活行動
(1986年6月の聞き取りによる)

日は、9時に家族で自宅を自家用車で出発し、11時20分に栃木県のいがしら公園(a)に到着した。15時30分に公園を出発し、17時に茨城県内の道路沿いのレストラン(b)に到着し、食事をとった。その後、18時にレストランを出て、18時30分に帰宅した。

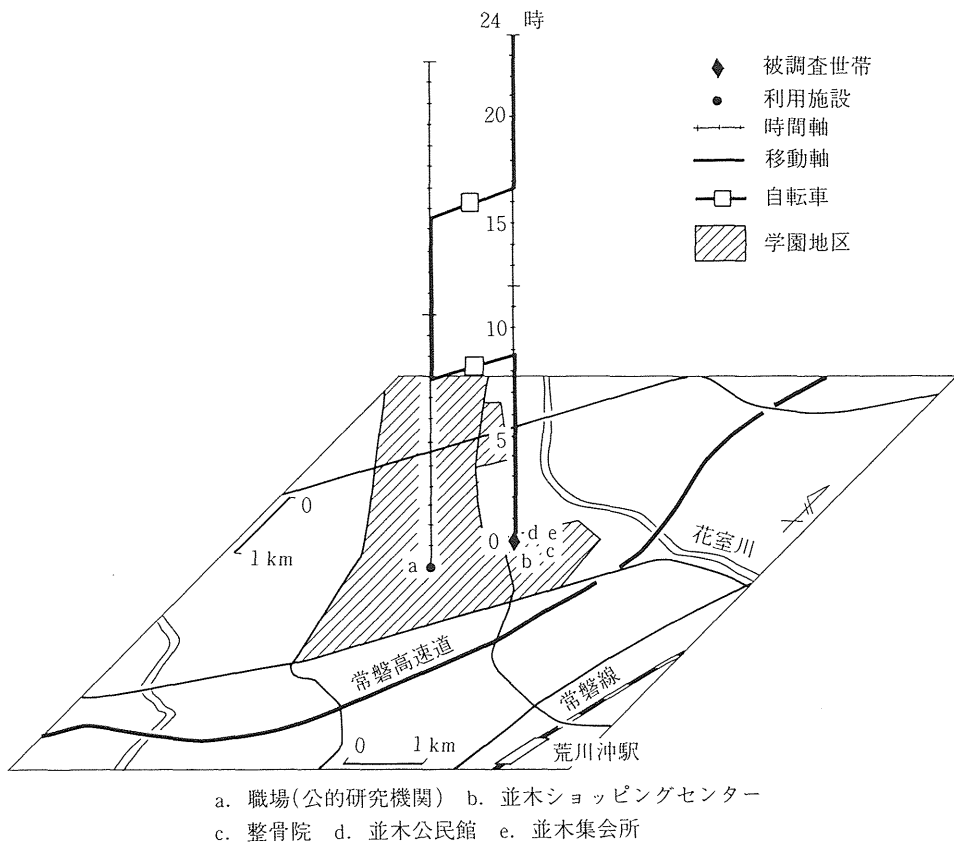
週末は、家族での日帰りのドライブを毎週のように行なう。この行動に共通することは、9時頃自宅を出て、11時頃目的地に到着するという範囲を目的地に選んでいる点にある。

3) 就学後の子供を持つ主婦の場合

a. Dさん(就学後の子供を持つ主婦)

Dさんは、夫の転職のために1975年8月より当地に居住し始め、1986年11月現在、夫(42歳)、本人(40歳)、長男(17歳)、次男(13歳)の4人家族である。自家用車を1台所有し、Dさんも運転免許を持っている。現在Dさんは並木地区と東大通りをはさんで隣接する研究機関で時間給勤務に従事している。

以下に、Dさんの1986年11月4日(火曜日)の週日の生活行動を記述する(第12図)。Dさんはこの日、8時40分に自転車で職場(a)に向かい、8時50分に到着した。9時から16時30分まで勤務し、



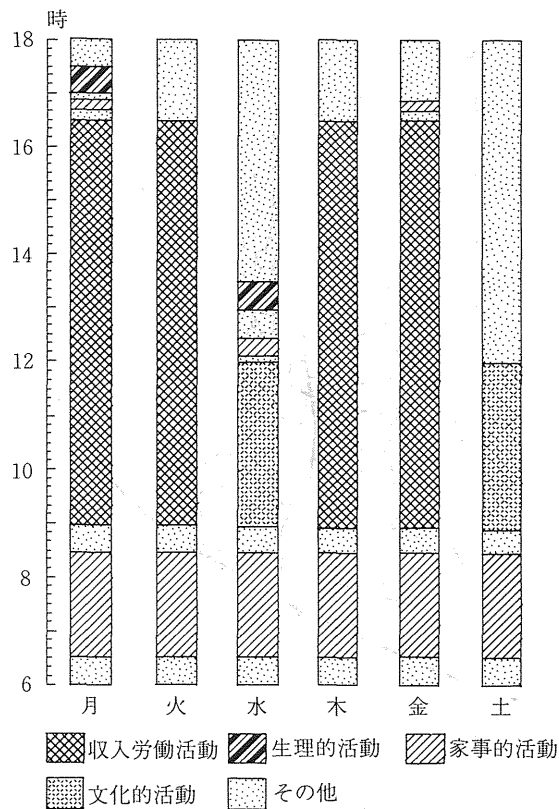
第12図 Dさん(就学後の子供を持つ主婦)の週日の生活行動
(1986年11月の聞き取りによる)

勤務終了後16時40分に帰宅した。

事例にみられた収入労働行動の他、隔日で勤務からの帰り道に並木ショッピングセンター(b)で買物をする。その他、Dさんの週日の生活行動は、第13図のように規定されている。収入労働行動は、月・火・木・金曜日の4日間である。その他、事例として取り上げた当時は、膝の治療のため月曜日と水曜日に整骨院(c)に通っていた。また、勤めない水曜日には、並木公民館(d)の卓球クラブに通い、土曜日には並木集会所(e)で編物を習う。卓球クラブと編物は、次男の小学校入学と同時に始めた。なお、週日の移動はすべて自転車による。

次に、週末として、1986年11月3日(文化の日)の生活行動を以下に記述する(第14図)。Dさんは11時に夫と2人で自家用車で自宅を出て、11時10分から12時50分まで大規模スーパーマーケット(a)で買物をした。13時に帰宅した後、15時30分に、一人で自転車で並木ショッピングセンター(b)に行き、食料品を購入して16時に帰宅した。その後、次男と夫と3人で飲食店(c)に赴き、食事をとり、18時15分に帰宅した。なお、長男は19時に帰宅した。

休日は、ほぼ1日に1回の移動のみであり、この事例は、移動回数がいつもより多い。外出は、通常夫とともに自家用車で行なう。子供がクラブ活動で外出中に行なうため、時間は午前中または午後



第13図 Dさんの月一土曜日のタイムスケジュール
(1986年11月の聞き取りによる)

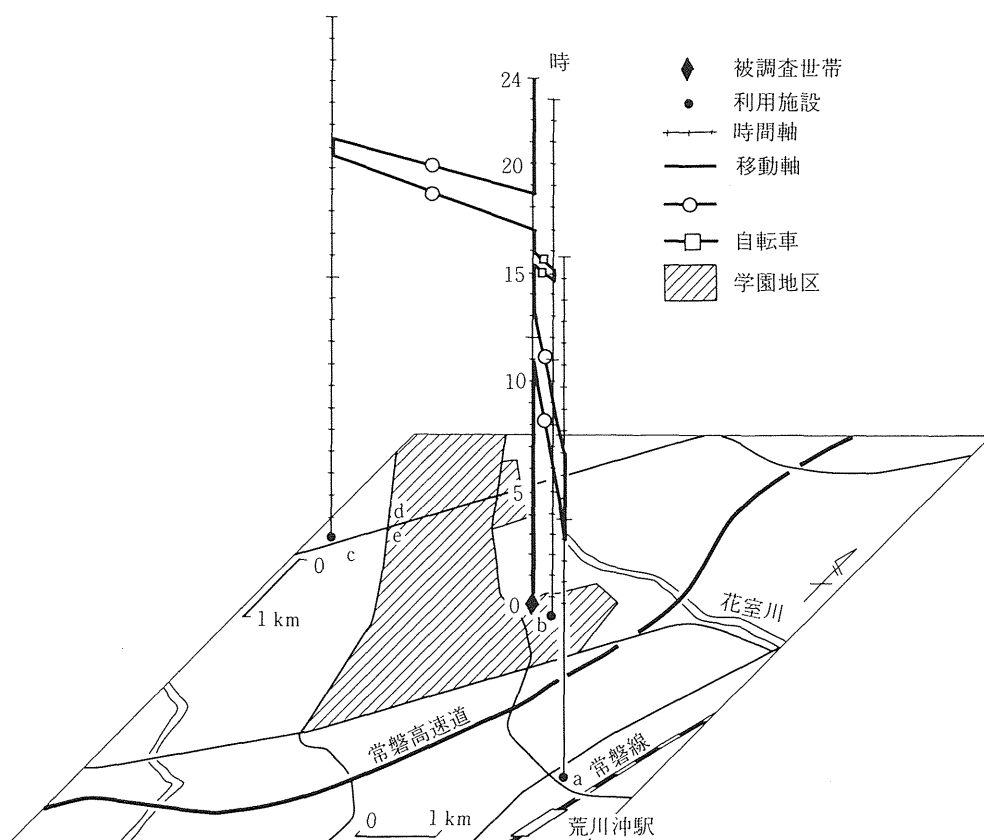
の3時間程度である。移動先は事例でみられた場所の他、学園中心地区の百貨店(d)や大規模スーパーマーケット(e)であることが多い。

休日における家族単位での移動は、長男が小学校高学年になり、学校のスポーツクラブに入って以来なくなった。ただし長男が小学校の頃は、長男の試合のために次男と夫と3人で試合場への家族単位による移動があった。しかし、聞き取り調査の時点では、次男も中学生となり、家族単位での移動はほとんどなくなった。

b. Eさん（高齢者の場合）

就学後の子供を持つ主婦を調査している中で、少数だが複合家族が存在した。そのうち、高齢者は他の主婦とは異なる生活行動を行っていたため、その事例としてEさんの生活行動を以下に記述する。

Eさんは、1978年に息子夫婦の転勤のため、当地に居住した。1986年9月現在、本人（77歳）は、息子夫婦と孫と同居している。Eさんの週日の事例として、1986年9月25日（金曜日）の行動を取り



a. スーパーマーケット(身の回り品) b. 並木ショッピングセンター
c. 飲食店 d. 百貨店 e. スーパーマーケット

第14図 Dさん(就学後の子供を持つ主婦)の週末の生活行動
(1986年11月の聞き取りによる)

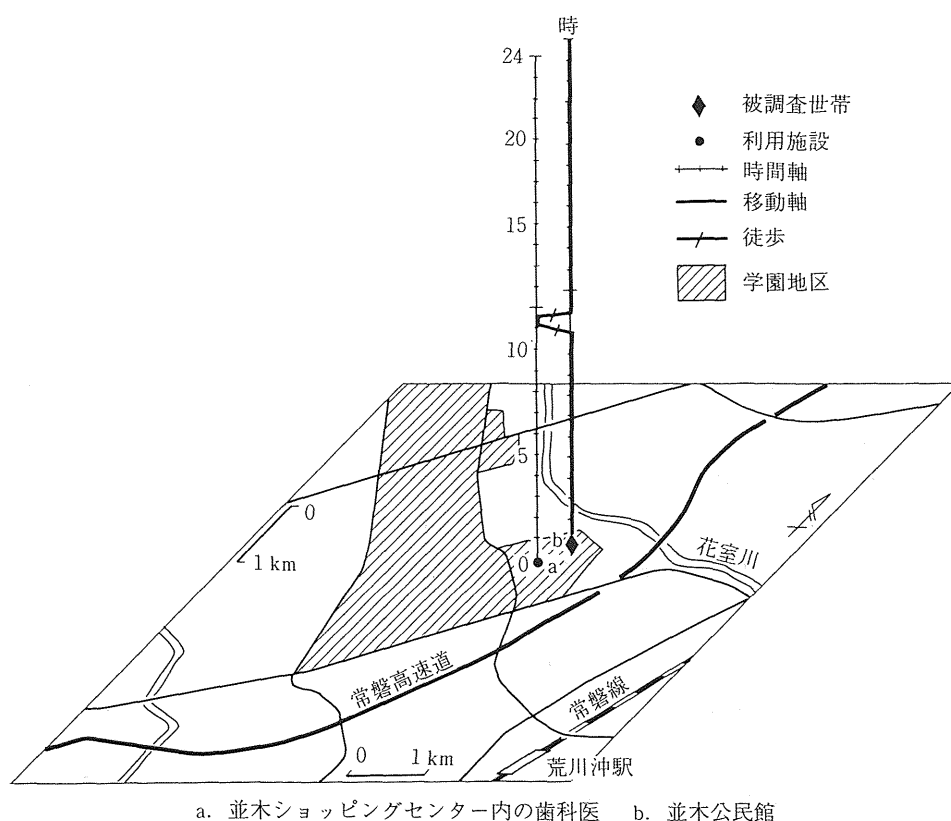
上げた(第15図)。5時30分に起床、8時に家族とともに食事をとった後、9時10分から文化祭に出品するパンフラワーを作った。10時に予約してあった並木ショッピングセンター内の歯科(a)に徒歩で出かけた。10時20分には治療を終え、その後並木ショッピングセンターで買物をし、10時35分に帰宅した。帰宅後は、パンフラワー作りに専念し、外出行動はなかった。

週日の移動先は、並木ショッピングセンター(a)、並木公民館(b)または並木住宅内に限られている。移動手段はほとんど徒歩であり、ベデストリアンデッキ¹²⁾をしばしば利用する。金曜日の13～16時までは並木公民館でのパンフラワーのサークルに参加する。

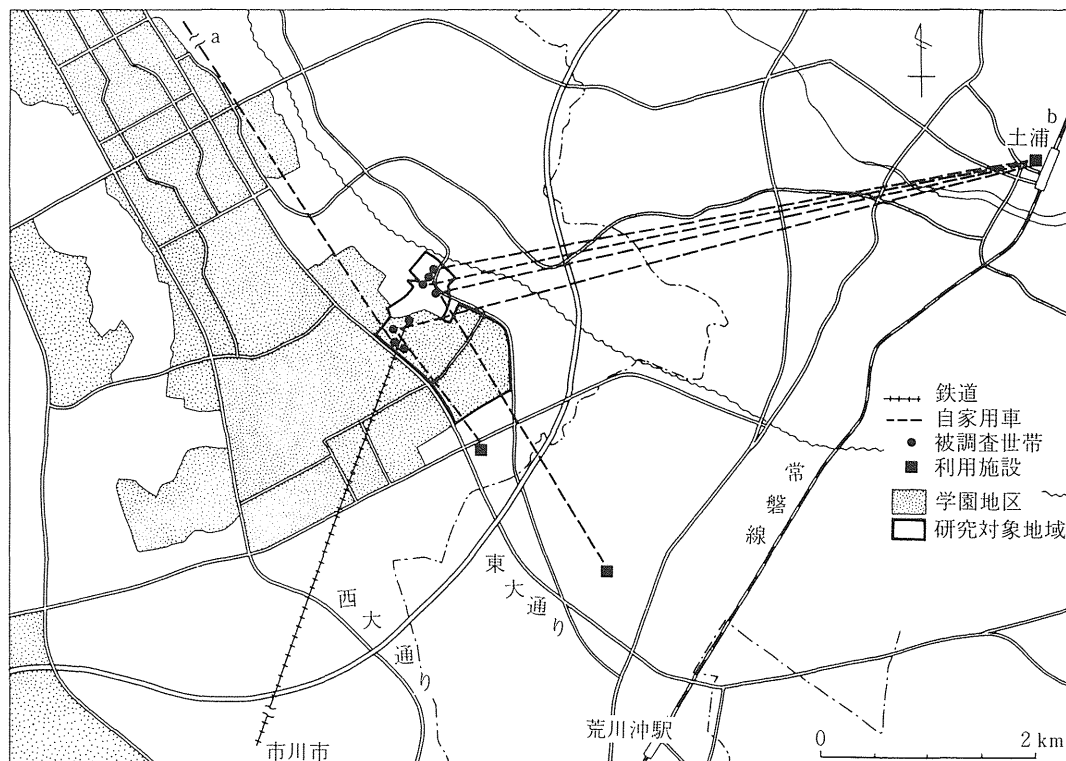
週末はほとんど外出はしない。並木3丁目住宅に居住するサークルを通じて知り合った友人と会うのも楽しみの一つである。しかし、友人宅の訪問は、週日の14～15時からの1時間半ほどであり、原則として週末は行かない。

II-2 各種生活行動の特徴とその変容

本節では、並木地区での主婦の各種生活行動を学園都市建設期における住民の行動と比較しながら、第16図～第32図を基に述べる。生活行動の類型区分は、研究方法で述べた通りである。なお、各種生



第15図 Eさん(高齢者)の週日の生活行動
(1986年10月の聞き取りによる)



第16図 並木・上大角豆地区における主婦の1976年の歯科受療行動
(1986年11月の聞き取りによる。第17～32図も同じ)

活行動と生活行動のリズムからみられる制約の関係については第Ⅳ章で述べる。

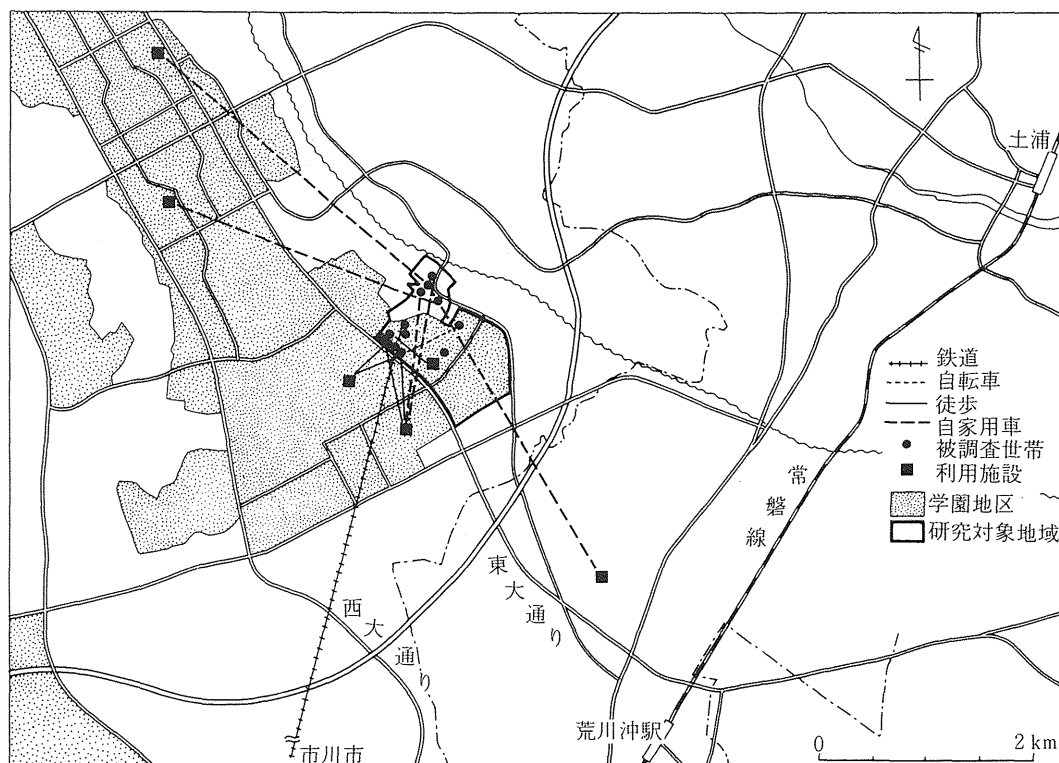
1) 生理的生活行動

a. 受療行動

最初に受療行動について述べる。本項では、聞き取り調査によって利用頻度が平均して高かった歯科と内科を対象とする。

第16図にみられるように、1976年当時の歯科受療行動は、特定の移動先に限定せず、自家用車もしくは鉄道を用いて遠距離の移動を行なっているか、行動を行なっていないことが分かる。当時、学園地区の歯科医は、並木地区より8.6km離れた北部の大穂町に1軒(a)しかなかった。最近接施設は土浦市内(b)であったが、そこへの移動は事例の中には出現しなかった。第17図にみられるように、1986年現在では歯科医が増加した結果、居住地より0.8km以内で完結している。移動手段は自転車または徒歩である。また、子供が乳児のBさん及び居住年数の短いAさんには歯科受療行動はみられなかった。

歯科受療行動に対し、1976年当時の内科受療行動は学園地区の竹園(a)に集中していた(第18図)。移動手段は自家用車もしくは自転車であった。当時の最近接施設は既存集落内(b)(並木地区より約1.6km)であったが、その利用はみられなかった。第19図にみられるように、1986年現在では並木



第17図 並木・上大角豆地区における主婦の1986年の歯科受療行動

地区及びその周辺に内科が開院している。内科受療行動も居住地より0.8km以内がほとんどで移動手段は自転車为主であるが、乳児を持つBさんは竹園地区の内科医院(a)を利用していることから、歯科受療と受療行動範囲が異なっている。ただし、学園地区内で完結する学園依存型という意味では共通していた。

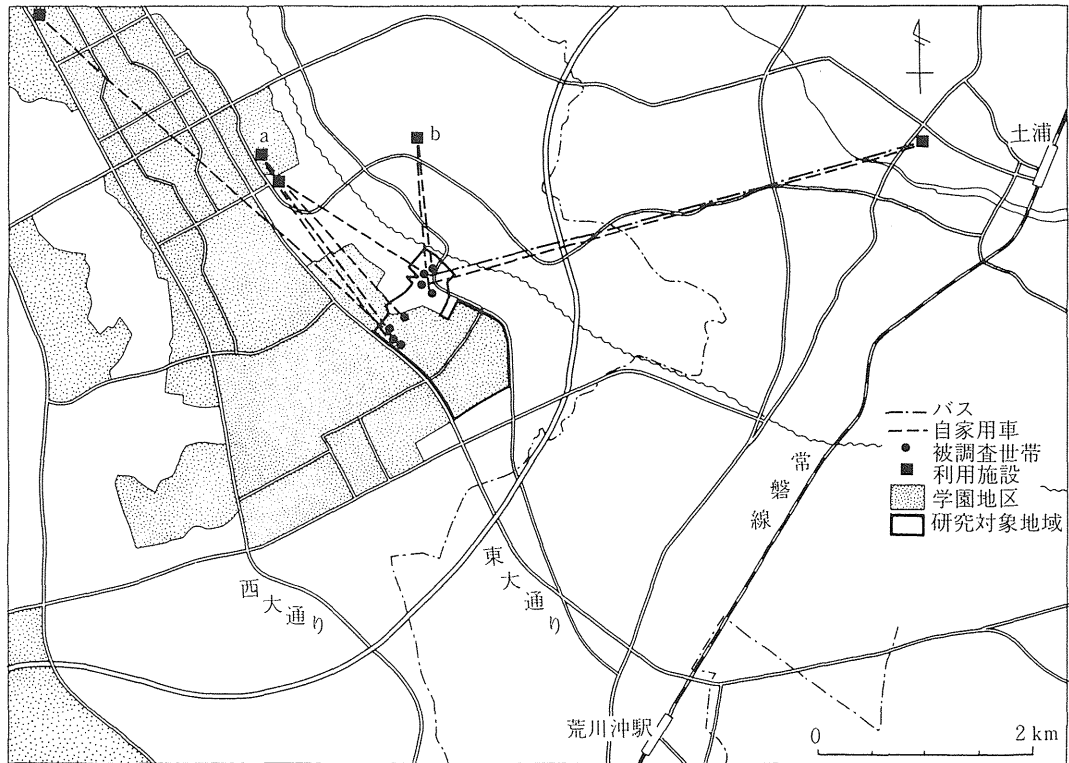
b. 美容行動

次に、美容行動について述べる。1976年当時の美容行動は、受療行動と異なり、土浦(a)が中心であったことがわかる(第20図)。すべての事例がバスで移動し、月1回もしくは隔月1回の割合で利用していた。第21図にみられるように、1986年現在では、東京に勤務地をもつAさん、和歌山県の実家に帰ったときに利用するCさんの場合を除けば、居住地より0.6km以内で完結している。移動手段は自転車为主であった。

2) 家事的生活行動

a. 買物行動

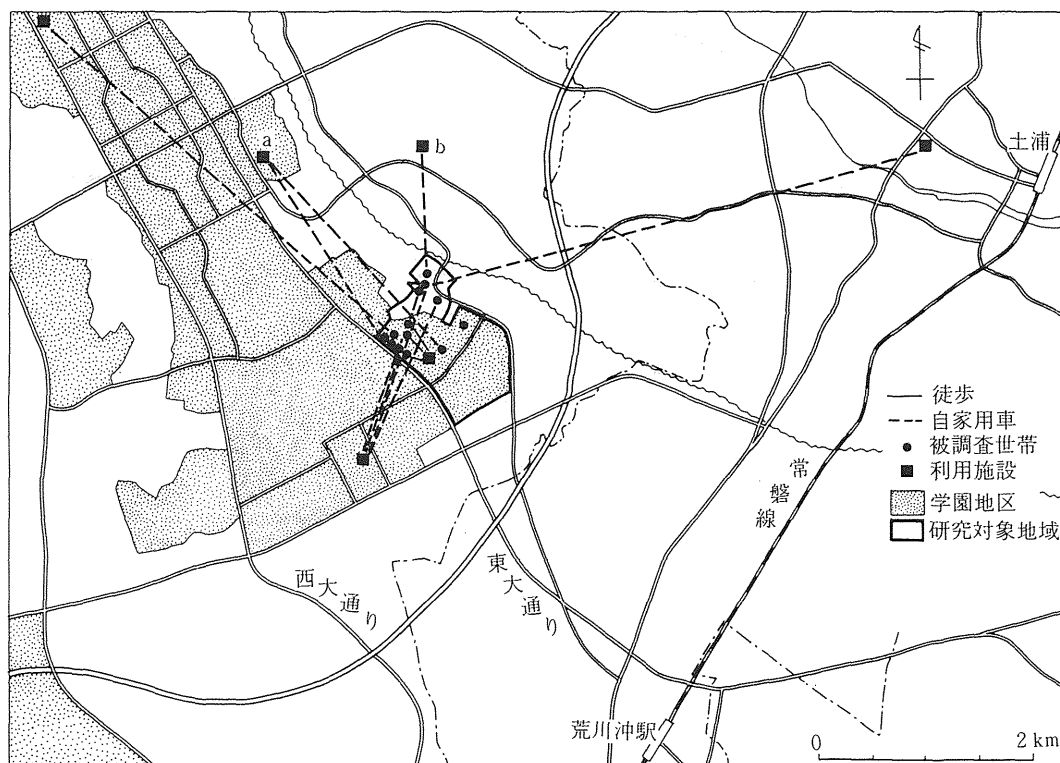
買物行動の範囲は、財の品目により買物の頻度が異なり、買物行動の範囲に著しい差が表われる。そこで、本研究では、買物行動のうち、最寄品として日常食料品、買い回り品として衣料(よそゆき着)を取り上げた。第22図にみられるように、1976年当時の日常食料品の買物行動は、並木地区においてはすべて居住地区より3.2km離れたスーパーマーケット(a)を自家用車で利用していることが分



第18図 並木・上大角豆地区における主婦の1979年の内科受療行動

かる。利用頻度は週1～2回であった。週末、夫が自宅にいるため自家用車を利用できる時に限られていた。その他、不足分は、ほとんど毎日並木地区駐車場を訪れる移動販売車を利用することで補っていた。当時、最近接施設は並木地区より1.3kmの既存集落内のスーパーマーケット(b)であったが、そこは利用されていなかった。1986年現在では第23図にみられるように、並木地区内ではほぼ完結している。移動手段は自転車、利用頻度は平均週3回程度と日買物行動は可能になったが、移動販売車、生協によってほとんど移動を伴わないで行える買物行動が盛んであり、それが全体として他の商業施設を利用する頻度を低く抑える原因となっている。また、東京に通勤しているAさんの場合、通勤帰りに荒川沖駅前の百貨店(c)で買物を行なっている。

次に買い回り品である衣料(よそゆき着)の買物行動について述べる。第24図に見られるように、1976年当時は土浦(a)が買い回り衣料品購入の中心地であったことが分かる。しかし、週日における移動手段はバスに限られており、週末、自家用車で月1回ほどの行動が多かった。また、柏や東京(b)にも伸びていた。この衣料品買物行動は、1986年に学園中心地区に大規模スーパー・大手百貨店が開店したことにより、大きく変化した。第25図に見られるように、1986年現在では、月1回学園中心地区(c)へ自動車もしくは自家用車で出かけている。また、以前までは頻繁に利用していた土浦中心商店街は季節に1回出かける程度に減少した。ただし、乳児をもつBさんは学園のみ、東京に勤務地をもつAさんは東京で買物行動を行なう。



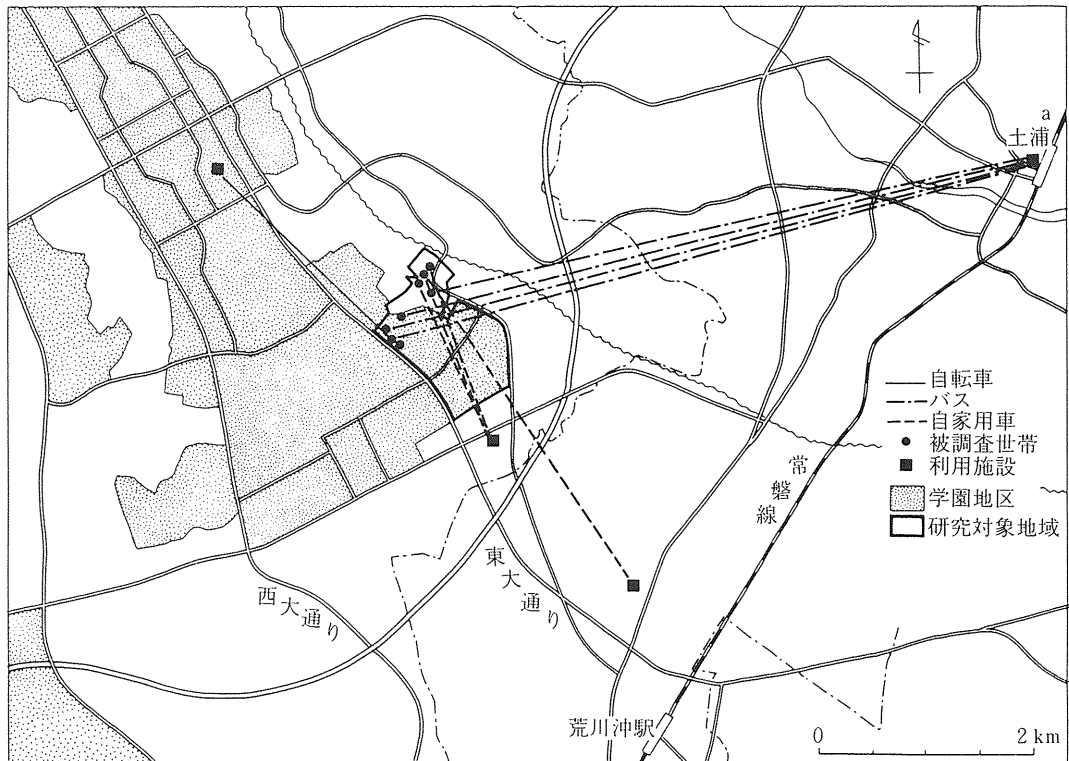
第19図 並木・上大角豆地区における主婦の1986年の内科受療行動

b. 金融行動

次に金融行動として郵便局と銀行の利用行動について述べる。第26図及び第28図にみられるように、1976年当時は並木地区より2.1km離れた竹園(a)までバスまたは自転車で移動して利用していた。内科同様、竹園が当時最近接施設であり、日単位の行動圏の中心地を形成していたことが分かる。第27図及び第29図にみられるように、1986年現在では、居住地から0.6km以内の並木ショッピングセンター(b)内へ、自転車または徒歩で移動している。これは銀行、郵便局とも全く同じであった。

3) 収入労働行動

収入労働行動には季節に1回程度の断続的なものもあるが、ここでは月1回以上の頻度で移動を行なうものに限定して述べる。第30図にみられるように、並木地区の場合、東京から移転して居住年数がいまだ短く、前住地での勤務場所をそのまま保っているAさんの事例がみられ、他にも東京への通勤者が少数ながらいる。ほとんどは半径1.8km以内の近隣の研究施設(a)に自転車で通勤している。また、聞き取り範囲の対象内ではすべて時間給勤務であった。その際、子供が大きくなってから勤務を始め、労働に拘束されるのではなく、移動可能時間に労働を選択している点に特色がある。このことから、恒常勤務をするためには就職機会は少なく、遠距離通勤を余儀なくされていることが理解できる一方、時間給勤務の場合には、ある程度職住近接が実現していることがうかがえる。1976年当時には、移動後居住年数が短い人の中には、東京への通勤者がいたと推測できるが、結婚または転勤によ



第20図 並木・上大角豆地区における主婦の1976年の美容行動

る移転とともにほとんどの人は、仕事を辞め、当地での収入労働行動は行なわなかった。

4) 社会的・文化的生活行動

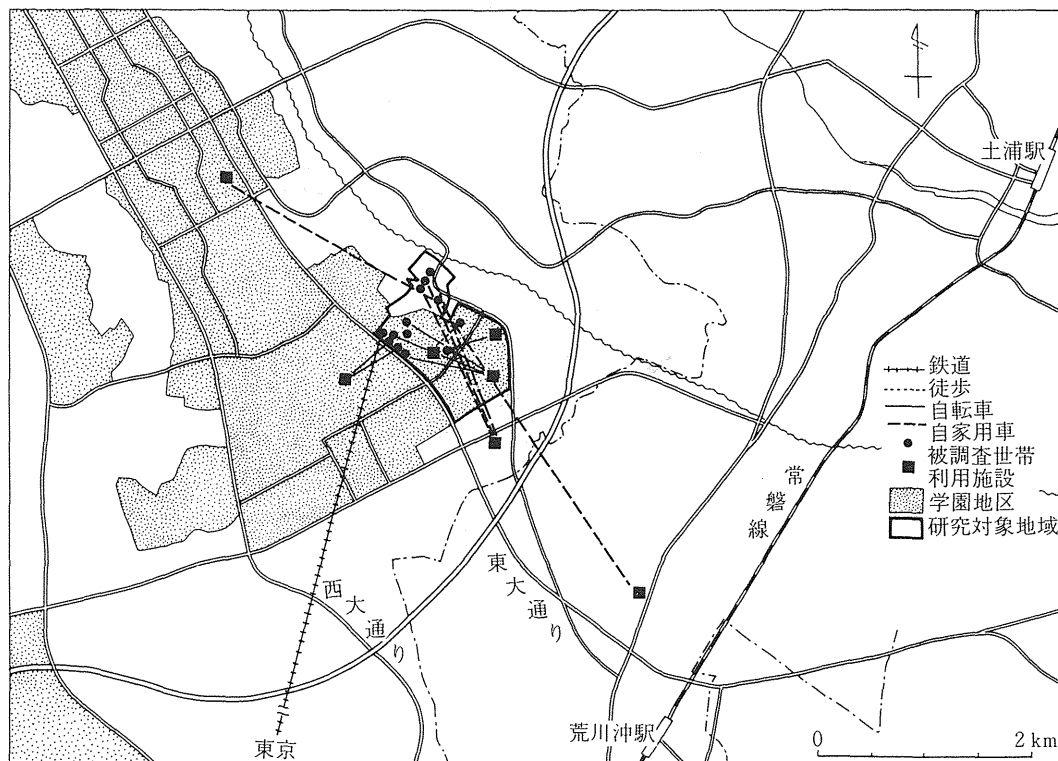
ここでは、月1回以上の頻度を持つ定期的行動に限って述べる。

a. 社会的行動

本項ではPTAなどの学校関係の行動の他、生協など各団体に所属しての活動はすべて選択した。第31図に示されるように、並木地区では、就学している子供をもつ場合、学校への移動がみられる。また、学校以外の活動では、生協や新婦人の会等、育児・生活に係わる社会的行動が多い。しかし、移動手段は自動車がほとんどで、並木公民館(b)や集会所を使う他、並木住宅内や近隣の広場(c)を利用している例もみられるなど、並木地区内で完結していることが多い。

b. 文化的行動

乳児をもつBさんを除き、第32図にみられるように、並木地区の公民館、集会所、住宅内を頻繁に利用している。移動手段は自転車ほとんどで半径0.6km以内である。また、テニスコート、プールをもつ公園(a)が比較的近いため、そこへの指向も強い。また、Eさんのように高齢者になると、移動は趣味のサークルのような文化的行動によるものがほとんどである。旅行に行く場合もこのサークルで知り合った仲間と出かける。また、東京へ移動する事例がみられるが、これは現在の技術、教養を更に深め、収入労働行動に生かすような研修という目的の場合であった。学園地区は、公民館、



第21図 並木・上大角豆地区における主婦の1986年の美容行動

集会所での活動が盛んであり、比較的多くの人々が、趣味で何らかの活動を行なっている。また、住宅内の主婦が講師をしている場合がほとんどで、文化的活動には特殊な良い環境であると言える。

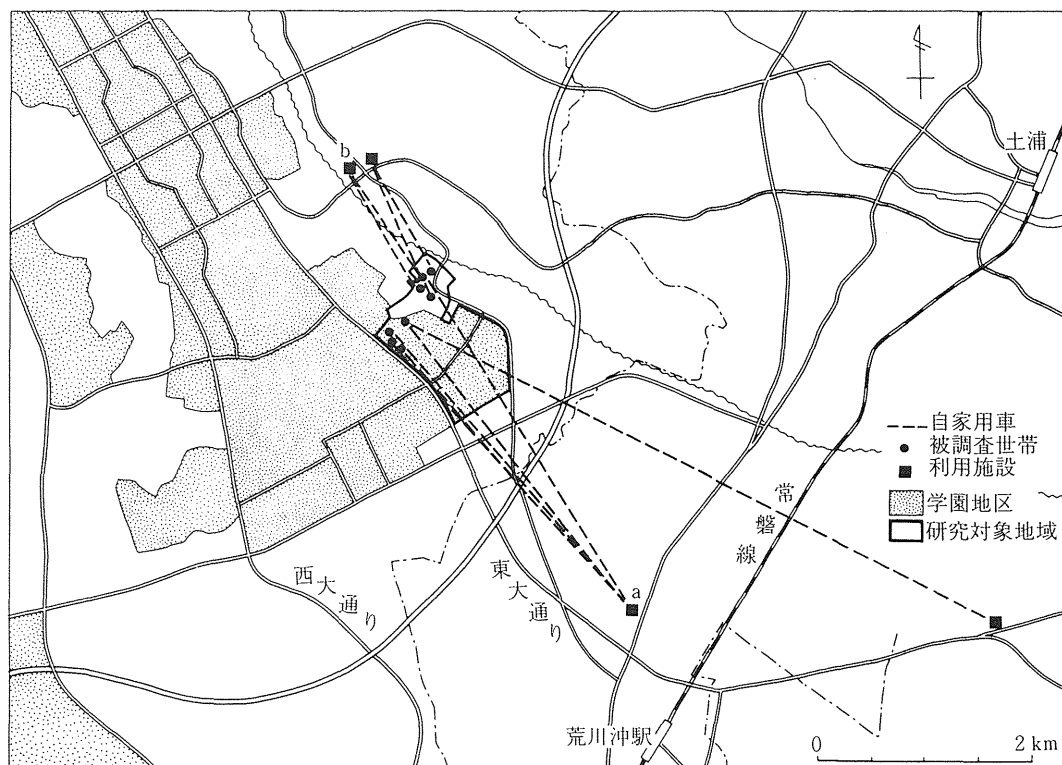
Ⅱ－3 生活行動のリズム

次に、第1節であげた主婦について、週日週末の生活行動における現実の距離をなくし、行動目的別に時間経過を見たところ、第33図のようになった。本項では本図をもとに、週日と週末のリズムにおける行動目的を考察し、そこから第2節に示した行動目的ごとの行動圏を合わせて、週日、週末のリズムを明らかにする。また、年単位リズムにおいても考察を行なう。

1) 週日のリズム

第33図に示されるように、週日は、乳児を持つ主婦から就学後の子供を持つ主婦まで、縦軸に示した1日の移動時間および横軸に示した行動目的が、大幅に異なっていた。1)の子供のいない主婦と4)の就学後の子供を持つ主婦では、子供を持つ主婦においてより週日・週末のリズムが明確であった。しかし、週日の移動時間と行動目的は類似していた。また高齢の主婦は、週日のみ移動し、週末にはほとんど移動を行なわないという特異な形状を示した。

2)の乳児を持つ主婦は、1日の大部分を育児的活動（第1図のCategoryでは家事的活動に含まれる）に費やす。子供のために、移動時間は1時間程度に限られ、移動手段も徒歩と限られている。従っ



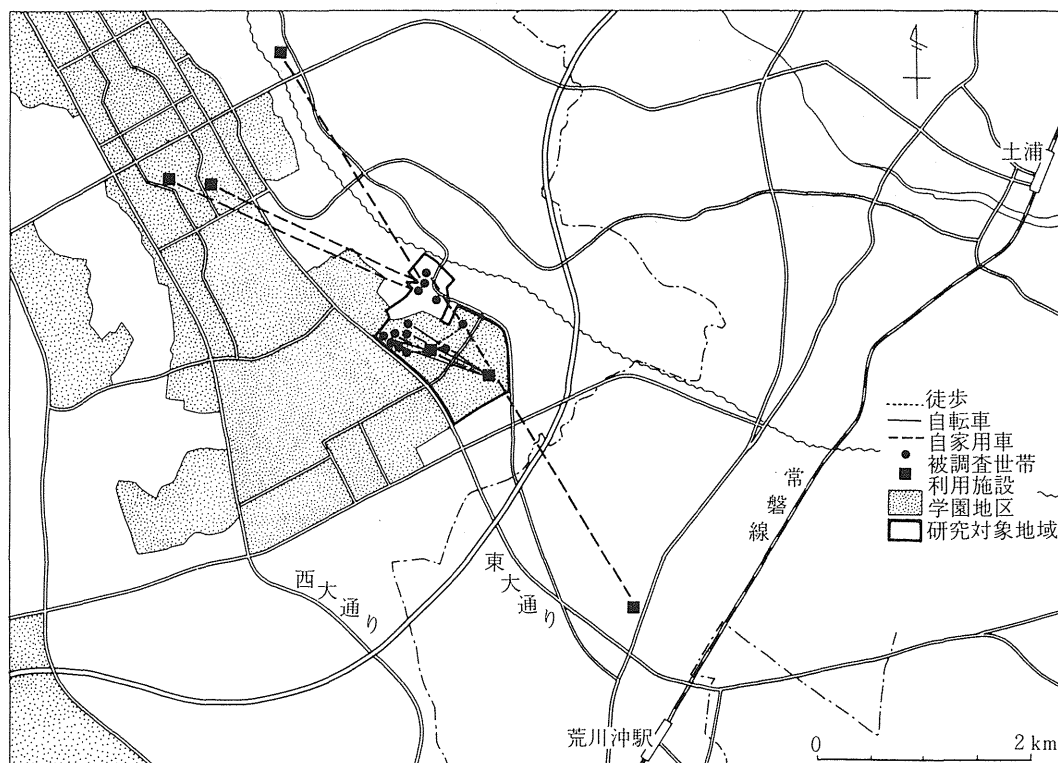
第22図 並木・上大角豆地区における主婦の1976年の日常食料品買物行動

て移動先は、近隣の公園または並木ショッピングセンターと限定されている。

2)の幼稚園児を持つ主婦は、午前中は定期的な文化的活動を行なっている。一方、午後は子供の送迎や日常食料品の買物などの短時間の移動を頻繁に行なっている。子供が幼稚園に行っている間は、移動可能時間となり、定期的な活動も可能であるが、午後には子供のために定期的活動が不可能となる。移動先もそれに適応して特徴を有する。午前中は学園中心地区への買物行動や、学園内の公園でのスポーツの他に、既存集落内の画廊へ絵画鑑賞へ赴くというような学園地区に限定しない比較的広範囲の移動をなしている。それに対して、午後は子供の送迎という行動により、自宅より2 kmの移動も見られるが、滞留時間は持たず、移動先はほぼ並木地区内のショッピングセンター、またはスーパーマーケットに限られる極めて狭小な範囲の移動にとどまる。

4)の就学後の子供を持つ主婦は、1日の大部分を収入労働行動に費やしている。また、勤務のない週日には文化的行動がみられる。このようなCategory Spaceの様態は、他の事例においても子供が小学校中学年程度以上の場合によく見られ、並木地区においては一般的な傾向である。また移動先を見ると、勤務場所である研究機関と並木公民館、並木ショッピングセンター、並木地区内スーパーマーケットに限られており、幼稚園児を持つ主婦の生活行動が近距離で完結していることがわかる。

それに対して1)の子供のいない主婦は、他の主婦と移動時間及び行動目的は類似しているが、移動先は東京とかなり遠距離に及んでいる。しかし、勤務のない日は、自宅より1.6 kmの公園プールへ



第23図 並木・上大角豆地区における主婦の1986年の日常食料品買物行動

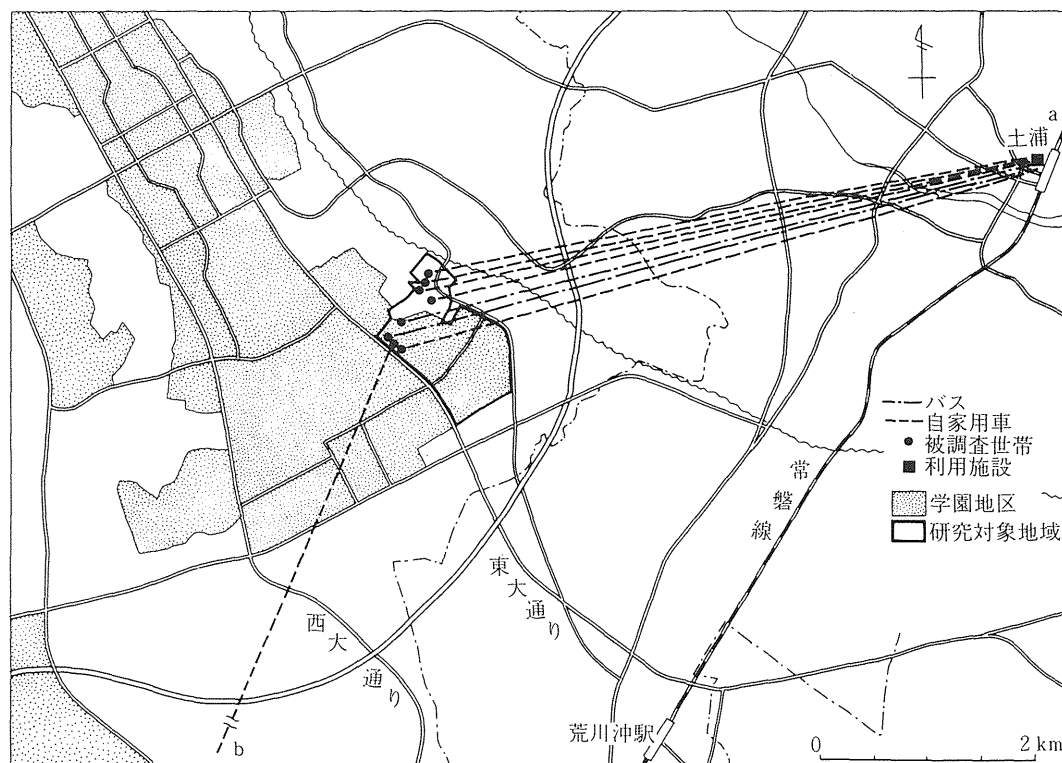
の移動がみられる他は、自宅周辺の並木住宅内と近隣で完結している。

5)の高齢の主婦は、週1日趣味のサークルという定期的な文化的活動に移動がみられる他は、買物行動や受療行動に移動が生じる。しかし、移動先は、文化的活動においては並木公民館、買物行動や受療行動は並木ショッピングセンターと2か所に限られている。

2) 週末のリズム

週末のリズムは、第33図に示したように、特に子供を持つ主婦に明確に表れている。1)の子供のいない主婦は、週日の収入労働行動が東京という遠距離に及んでいるため、週末にはほとんど移動を伴う行動は生じない。また、5)の高齢の主婦は、原則として週末には外出しない。一方、子供を持つ主婦の週末のリズムは、衣料品等買い回り品の買物行動としての家事的行動や、外食・ドライブといった余暇活動としての文化的生活行動が顕著である。移動は親子・夫婦といった単位で行ない、自家用車の利用が顕著である。行動圏においても、その圏域は週日のそれと比較して差異がみられる。

並木地区における週末の行動圏は、原則として週日と変わらず、学園内の行動が顕著である。週日の行動範囲は並木地区内及び周辺に限られ、学園内でも狭い範囲で完結していたが、週末の行動範囲は学園中心地区または荒川沖駅方面など、学園地区内の北西－南東に広がりを持つようになる。ただし、買物行動における移動先は、学園中心地区の2か所の商業施設及び荒川沖の大規模スーパーマーケットに集中するという限られた施設への移動が顕著となっている。



第24図 並木・上大角豆地区における主婦の1976年の衣料品買物行動

その他、家族全員による日帰りのドライブという余暇活動が、②の幼稚園児を持つ主婦に顕著にみられた。行動圏は第33図に示されるように、茨城県内各地及び近県で半径70km以内であり、常磐高速道路沿いに伸びている点に特色がある。

このような家族での週末の余暇活動は、就学後の子供を持つ他の主婦においても、子供の小さい頃にはほぼ共通してみられ、子供の家族依存期にみられる特色といえよう。しかし鉾田町の事例では、中学校下級学年までの子供を持つ家庭で見られたのに対し、並木地区では、子供が小学校中学年程度となり、週末にもスポーツクラブ等の社会的行動をとるようになるにつれて見られなくなる。

3) 年単位のリズム

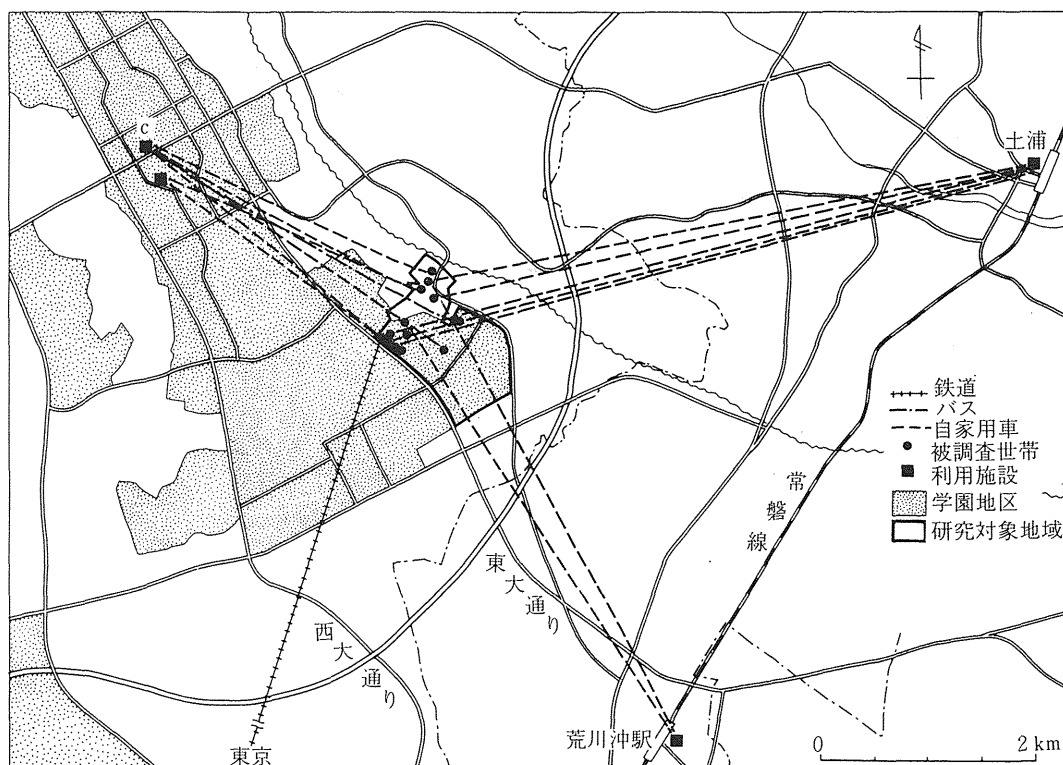
年単位のリズムは、年に1回程度行動がなされるという意味で用いる。並木地区では共通して、実家への帰省行動の際に遠距離の移動がみられた。子供のいない主婦には夫婦単位での、幼稚園児を持つ主婦には家族単位での宿泊を伴う余暇行動がみられた。その圏域は、ほぼ全国に及んでいる。

Ⅲ 上大角豆地区における主婦の生活行動

Ⅲ-1 生活行動の事例

本節で対象とした主婦は、作業仮説により、農業従事者、通勤者、高齢者とする。

1) 農業従事者の場合



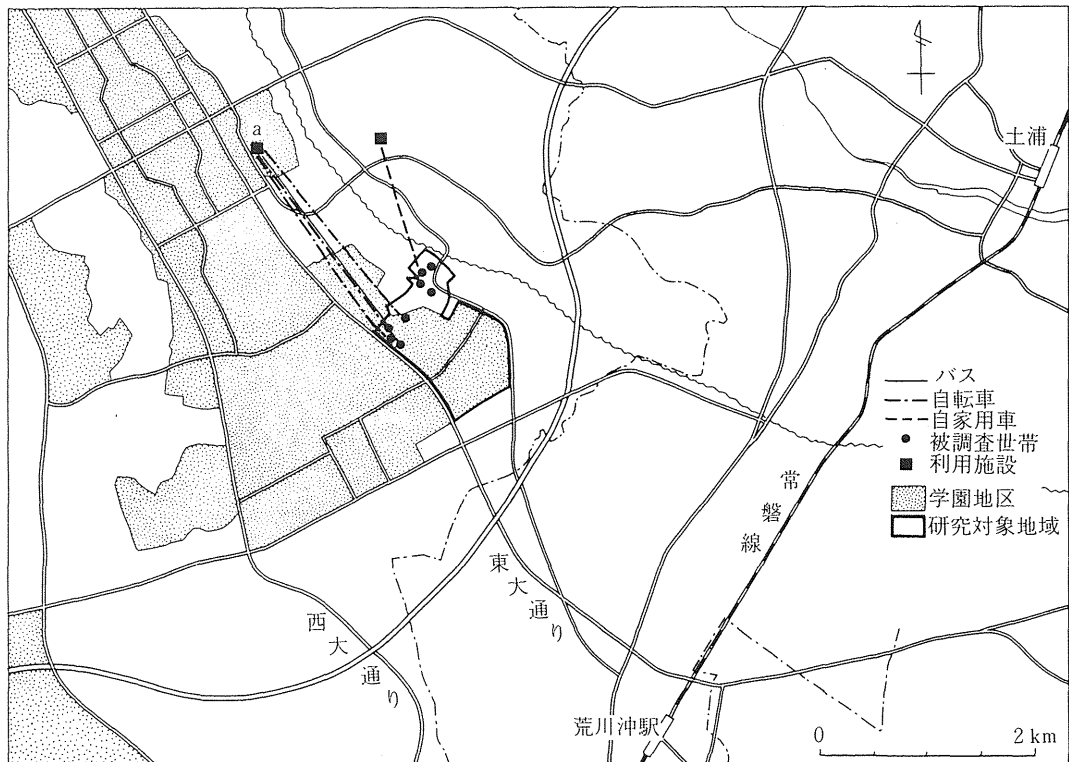
第25図 並木・上大角豆地区における主婦の1986年の衣料品買物行動

a. Fさん（穀物栽培者）

Fさんは、1964年12月より結婚のために当地に居住し始め、義母（70歳）、夫（50歳）、本人（42歳）、長男（20歳）、次男（15歳）、の5人家族である。ただし、長男は大学生で東京に下宿しているため、現在は4人で住んでいる。農業従事者はFさんと夫の2人で、以前は米・小麦などを栽培する専業農家であったが、現在は大麦とビール麦を輪作する他、賃貸住宅経営も行なう兼業農家である。自家用車は、トラック2台の他、普通自動車2台を所有し、この内1台はFさん専用である。以下にFさんの週日として、1986年10月30日（水曜日）の生活行動を記述する（第34図）。

Fさんは9時に夫とトラックで自宅を出て9時5分に畑(a)に到着した。12時に畑から自宅に向かい、12時5分に自宅に到着し、昼食をとった。13時に子供の教育費を振り込むために自家用車で並木ショッピングセンター内の銀行(b)に行った。13時35分に再び夫とトラックで畑(a)へ向かい、16時まで農作業を行なった。16時5分に自宅に到着し、夕食の準備にとりかかった。夕食後19時に自宅から2.5km離れた既存集落内のスーパーマーケット(c)に自家用車で行き、19時10分から19時30分まで買物をした後、19時40分に帰宅した。

調査日の行動は、日常の一般的な生活行動である。週日と週末の生活行動に変化は見られない。ただし、買物行動は事例にみられたように毎日行なうのではなく、週2回程度、自宅では作らない野菜以外のものをまとめ買いする。移動にはほとんど自家用車を利用する。他の家庭も、1人1台の割合



第26図 並木・上大角豆地区における主婦の1976年における金融行動(郵便局)

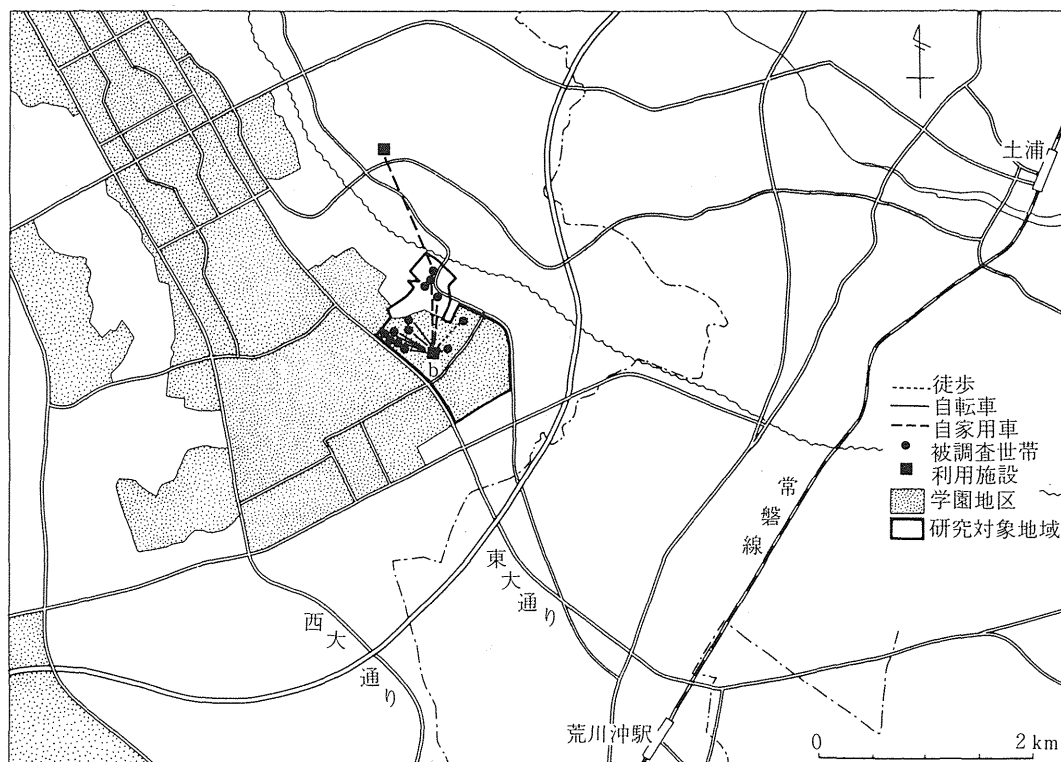
で自家用車を所有し、農村部でのモーターレーゼーションの進展は顕著である。また、子供が並木小学校、並木中学校に在学していた頃には、PTAの役員を務め、並木地区の主婦と知り合ったのがきっかけとなり、1981～1984年までは、隔週1回、2か所の趣味の教室に通っていた。時間帯は10～14時までであった。これによって、並木地区と共通の行動は子供を通して生じやすいことがわかる。

農繁期には、事例にみられた労働時間よりさらに長い収入労働行動を持ち、農閑期には事例に比較して短い労働時間となる。事例日は、これらの中間にあたる過渡期であり、麦をまく準備期であった。農閑期の12～3月には、隔週土曜日の9時30分から12時まで、自宅から6.8km離れた公民館で編物を習う。公民館には、桜村村内の農家の主婦が20～30人集まる。

b. Gさん(近郊野菜栽培者)

Fさんと同様農家ではあるが、近郊野菜を栽培するGさんの生活行動を述べる。Gさんは、1969年4月より結婚のために当地に居住し始め、現在、義母(67歳)、夫(40歳)、本人(39歳)、長男(16歳)、長女(13歳)の5人家族である。子供は高校、中学へ通学している。夫は土浦へ通勤しているため、農業はGさんが1で行なっている。自家用車は、トラックを1台、乗用車を2台、計3台を所有している。以下に、Gさんの週日として、1986年10月31日(金曜日)の生活行動を記述する(第35図)。

当日Gさんは8時30分から庭でほうれん草の出荷準備をした後、10時にトラックで自宅を出て、2分後に畑(a)に到着し、ブロッコリーの収穫を行なった。12時に自宅で昼食を済ませた後、13時に

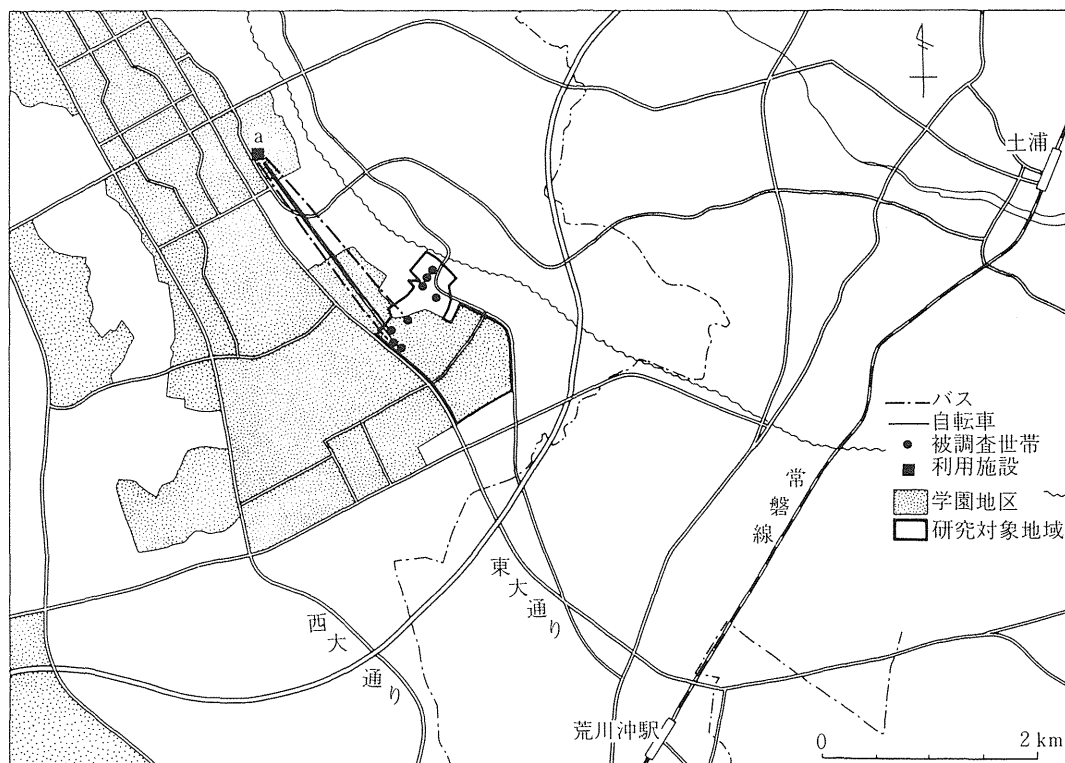


第27図 並木・上大角豆地区における主婦の1986年の金融行動(郵便局)

再び自宅を出発し、畑(a)で収穫作業を続けた。15時に畑から自宅に戻り、庭で出荷準備を行なった。16時に自宅を出発し、長女とともに自宅より2.9km離れた土浦市乙戸沼の卸売市場(b)へ向かった。16時10分に市場へ到着し、出荷を済ませ、16時25分に市場を出発し、そこから3.5km離れた既存集落内の酒屋(c)に向かった。16時40分に到着、買物を済ませた後、16時50分にそこを出発、自宅近くの並木地区内のスーパーマーケット(d)に17時に到着した。別の品物を買って17時30分に出発し、17時34分に帰宅した。夕食後、19時に長女を並木3丁目住宅内(e)に送り、19時15分に帰宅した。21時に再び迎えに出向き、21時10分に帰宅した。

土曜日以外の日は早朝または16時頃、卸売市場まで滞留時間を含めて往復30分の移動を行なう。市場がカップリング(coupling)の規制の場にもなっている。市場の帰りには市場近くのスーパーマーケットで買物をする。事例にみられた買物行動は、酒を購入するために取られた行動であった。

次に週末として、1986年11月1日(土曜日)の生活行動を述べる(第36図)。まず、8時30分に自宅前の畑(a)へ出かけ、収穫後の畑の手入れを行なった。畑での作業は、12～13時の昼食をはさみ、14時まで続けた。帰宅後14時20分に自宅より5.2kmの既存集落内の病院(b)に、自家用車で長女と上大角豆内の友人の子供を連れて行き、14時30分から14時40分まで友人を見舞った後、長女とともに学園地区の中心にある百貨店(c)へ向かい、15時5分に到着した。16時15分に百貨店を出発、再び病院(b)に16時30分に到着した。16時40分に友人の子供を連れて病院を出発、16時50分に帰宅した。



第28図 並木・上大角豆地区における主婦の1976年の金融行動(銀行)

土曜日は市場が休みのため、週日の行動のように市場への移動は生じない。土曜日には、学園地区内や荒川沖駅付近への買物行動も出現する。

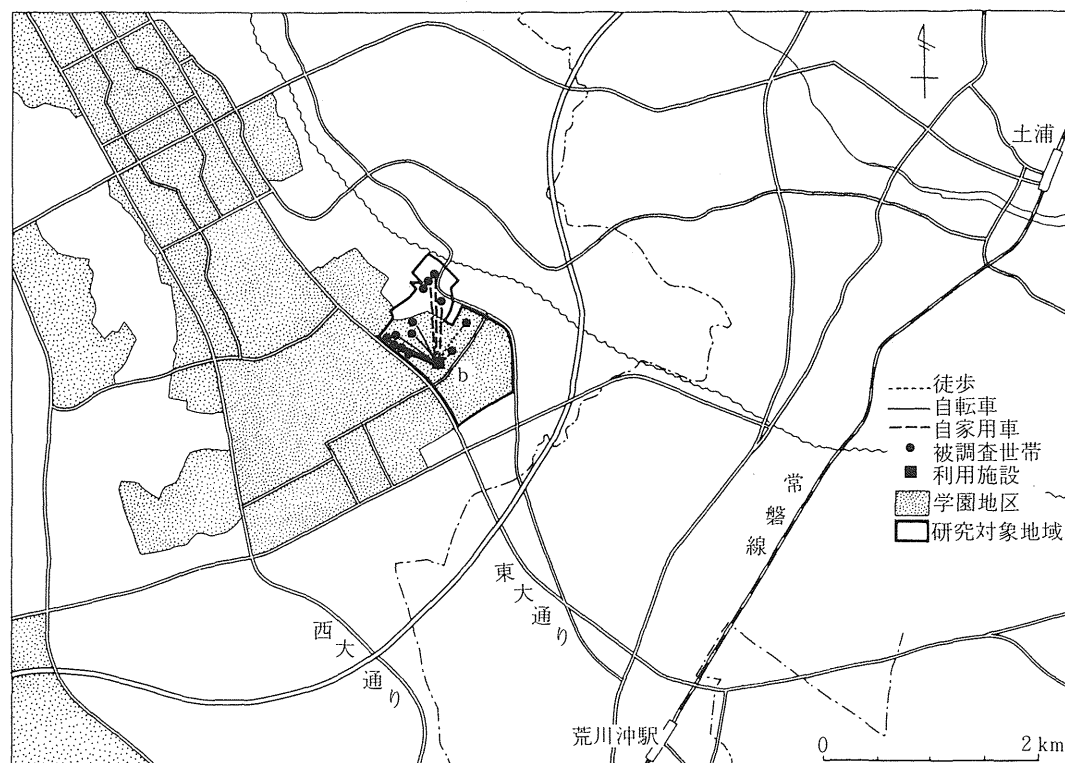
2) 通勤者の場合

Hさんは、当地に出生し、1981年3月に結婚、現在も上大角豆に居住し、父(64歳)、母(59歳)、夫(30歳)、本人(29歳)、長男(4歳)の5人家族である。長男は、並木幼稚園に通園している。Hさんは、学校卒業後、学園内の会社に就職し、現在も夫と同じ会社に勤務している。農業従事者は父のみである。自家用車は、トラック1台、乗用車3台を所有している。以下に、Hさんの週日として、1986年11月4日(火曜日)の生活行動を記述する(第37図)。

8時15分に自宅を出発、自家用車で職場(a)に向かい、8時30分に到着した。17時まで勤務し、17時30分に職場を離れた。途中、17時40分にクリーニング店(b)に寄り、17時50分に自宅から1km離れた24時間営業のコンビニエンスストア(d)に立ち寄り、17時55分に帰宅した。

月曜日から金曜日まで、週日はほとんど同様な行動パターンを有する。ただし、夕方の目だった買物行動は、週に1回程度であり、金曜日にスーパーマーケット(d)、もしくは学園中心地区にある大規模スーパーマーケットでまとめ買いを行なうことが多い。

また、Hさんは幼稚園児を持つが、週日には、食事の用意も子供の送迎もすべて両親がするため、育児時間に生活行動が制約されることはない。これは、上大角豆地区全体に共通することであり、子



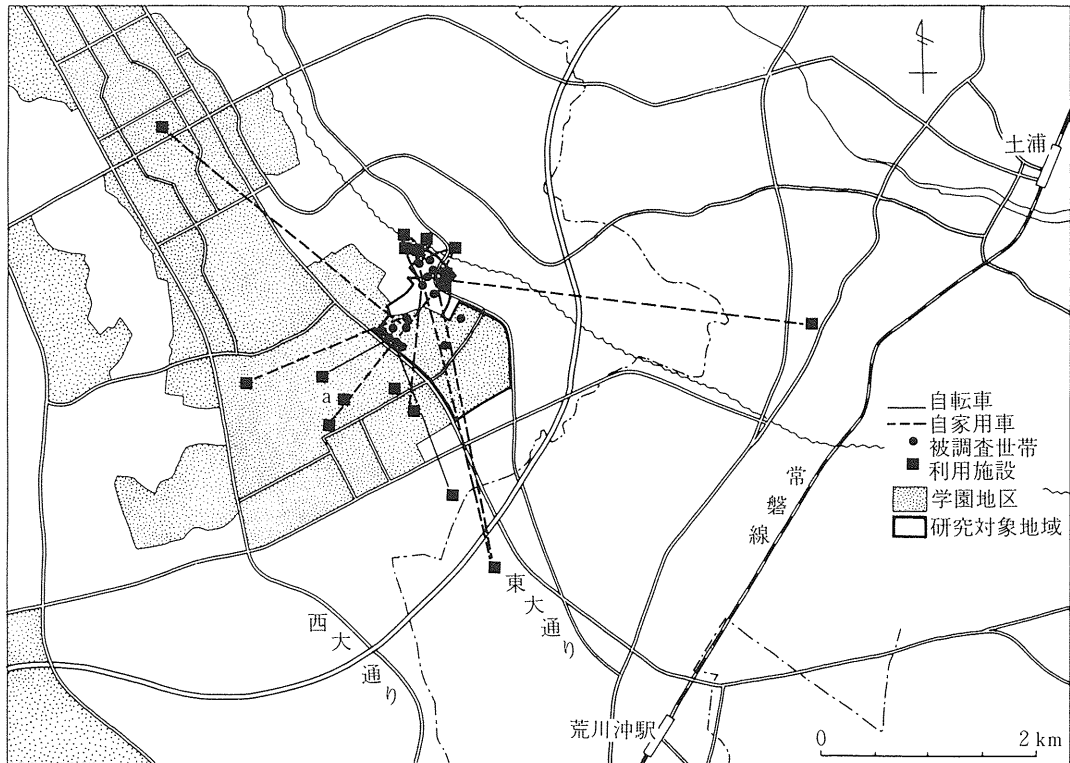
第29図 並木・上大角豆地区における主婦の1986年の金融行動(銀行)

供がどんなに小さくても、週日には何らかの仕事に従事し、専業主婦でいるのは子供が生まれたばかりの家1軒のみであった。近隣の保育所では、生後8か月から子供を預かるが、集落内の世帯はほとんどが複合家族のため、日中働きに出ている間の子供の面倒は両親がみている。

Hさんの場合、1987年2月に出産予定のため、通勤以外の定期的行動は見られなかった。しかし、1984年から1986年4月まで、長男は幼稚園就園前だったにもかかわらず、勤務を終えた後18時から2時間、学園中心地区にある百貨店や、並木地区内スポーツクラブで趣味の教室に通っていた。これは、両親と同居のため、帰宅時間に制約を受けていないためと考えられる。

次に週末の生活行動について述べる(第38図)。まず、9時45分に自家用車で自宅を出発し、並木住宅内に住む姉と2人で土浦市内の産婦人科病院(a)へ向かった。10時5分に病院へ到着し、診察の予約をした後、土浦駅前(b)へ向かい、10時15分から15時まで買物をした。その後15時20分にいったん帰宅し、17時に姉と再び病院(a)へ向かい、17時20分に病院に到着し、診察を受けた。18時に病院を出発、18時20分に帰宅した。その後、19時に自宅を出発して、土浦市内の夫の実家(c)へ向かった。19時15分に到着、15分間滞在して、19時30分に出発した。19時40分に土浦・学園線沿いのレストラン(d)に到着した。そこで夕食を済ませた後、21時に帰宅した。

職場が週休2日制のため、土曜日には学園内や土浦市での消費行動があり、県内に家族3人で遊びに出かける。両親は、しばしば留守番である。日曜日の9～10時の間には、学園内で子供の習い事が



第30図 並木・上大角豆地区における主婦の1986年の収入労働行動

あるため、その送迎を行なう。送って行った後は、自宅に戻るには十分な時間がないため、この間に買物をして、10時に子供を迎えに行き、その後学園内の飲食店に寄って長男と食事をするのが日曜日の一般的行動である。午後にはほとんど外出しない。

3) 高齢者の場合

IさんはFさんの母親である。以下に、1986年10月30日（木曜日）の生活行動を記述する（第39図）。Iさんは当日6時に起床、趣味で栽培している菊の手入れを庭で行い、7時30分に朝食をとった。22時に就寝するまで外出はなかった。

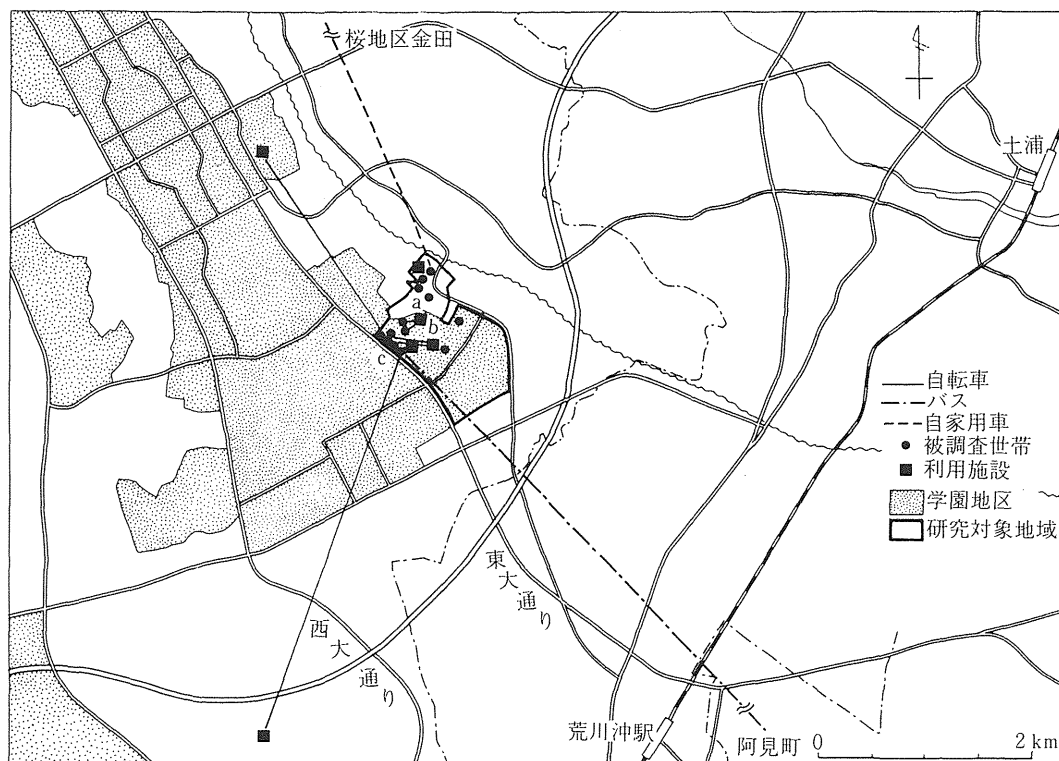
通常は、事例のように家に1日中いることが多い。外出は、週に1回の老人会の集まりと、月に1回の地蔵講の時のみである。ともに上大角豆地区内の研修センターに集まる。研修センターに行く日は、そこで9時から15時まで、ゆっくりと1日を過ごす。

Ⅲ－2 各種生活行動の特徴とその変容

本節では、上大角豆地区における主婦の生活行動を、並木地区と同様に1976年当時と比較しながら述べる。

1) 生理的生活行動

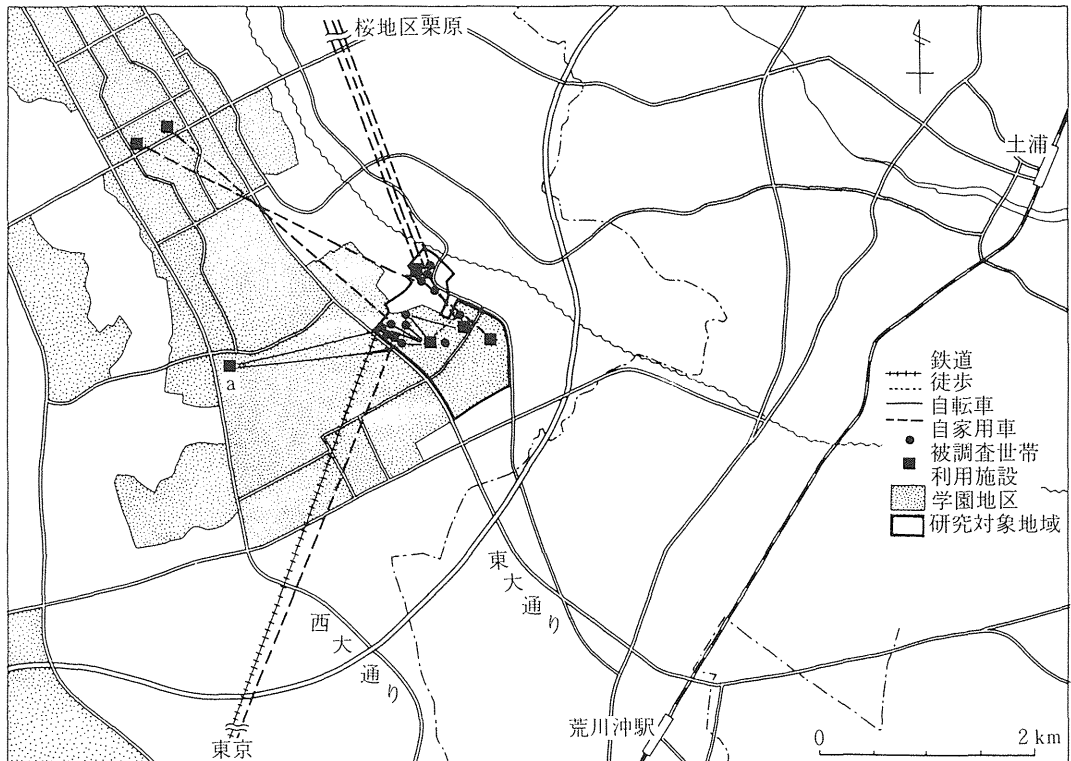
a. 受療行動



第31図 並木・上大角豆地区における主婦の1986年の社会的行動

並木地区と同様、歯科及び内科の受療行動について述べる。まず、上大角豆地区で特徴的なのは歯科、内科に限らず、すべての地区の利用について移動手段が自家用車に大きく依存している点である。1976年当時の歯科受療行動は最近接の土浦市(b)に集中していたが(第16図)、1986年においては学園地区内ではほぼ完結するようになった(第17図)。ただし、最近接施設である並木地区内(c)や工業技術院内(d)に開設された医院の利用はみられなかった。これはペDESTリアンデッキの沿線にあり、自動車での利用が容易ではないことが影響していると思われる。すなわち、並木地区にみられたような同じ学園地区依存型でも、自家用車で移動しやすい施設を利用する傾向がみられる。また、幼稚園児をもつHさんが学園内2.7kmの(e)を選択しているのは、勤務時間終了後の17時30分以降に利用可能な施設を選んでいるためである。Hさんは1日の移動可能時間が大きいため、勤務終了後も事例のような受療行動を選択できるものと思われる。

次に、内科受療行動について述べる。1976年当時の内科受療行動は、ほとんどが既存集落内の最近接施設である1.6kmの(b)を利用している(第18図)。その他、土浦市への指向性も強かった。1986年現在では、従前からの「かかりつけ」ということで(b)や(c)を利用している事例の他は、歯科同様、学園地区に開院した直線距離1.4kmと比較的近い(d)に集中している。ただし、最近接施設となった並木地区のペDESTリアンデッキに沿った(e)の利用はなかった。



第32図 並木・上大角豆地区における主婦の1986年の文化的行動

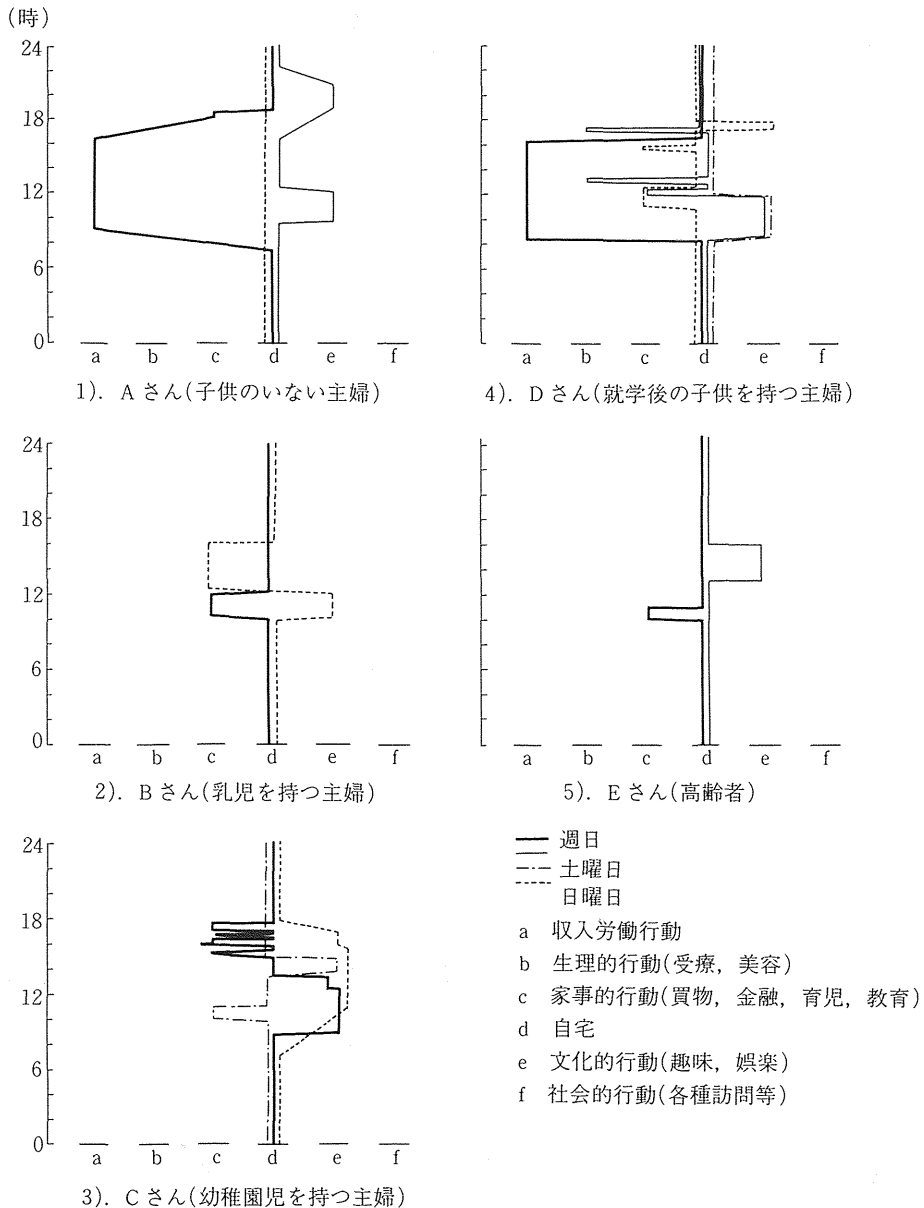
b. 美容行動

上大角豆地区の美容行動は特色ある傾向を示した。1976年当時はほとんどが直線距離1.6kmの既存集落内(b)に集中している(第20図)。移動手段はすべての事例が自家用車である。Hさんは土浦市の学校に通学していたこともあって、土浦の美容院(a)を利用していた。また、老齢のIさんは実家のある土浦市内の(c)を利用していた。第21図にみられるように、1986年現在になっても、この傾向はまったく変わらない。例外として、結婚し学園地区内で勤務するようになったHさんは、学園地区内の(d)を利用するように変化した。これは歯科受療行動と同様勤務終了後、利用可能な施設を利用するためである。

2) 家事的生活行動

a. 買物行動

まず、日常食料品買物行動について述べる。第22図にみられるように、1976年当時は最近接施設であった既存集落内の直線距離1.1kmにある2つの日常食料品店(b),(d)に集中していた。上大角豆地区内にも1軒の酒屋があったが、日常食料品は当所ではまかないきれなかったため、あまり利用されていなかった。1986年現在では並木地区(d), および既存集落内に開店したスーパーマーケットを利用するようになり、全体として学園内の商店を利用するようになった。しかし、最近接施設である並木ショッピングセンターはほとんど利用されていない。上大角豆地区より3.8kmと比較的遠距離の(a)



第33図 並木地区における主婦の生活行動のCategory Space(1986年)

を利用しているGさんは市場に出荷した帰路に近接している店舗に寄る。この点では並木地区のAさんの行動と類似する。

次に買い回り品である衣料品(よそゆき着)の買物行動について述べる。1976年当時は並木地区と同様に、土浦市(a)に依存していた(第24図)。しかし、自家用車を利用する点が、並木地区と大きく異なる。また、荒川沖駅前に百貨店が立地してからは、日常食料品の買物行動にみられた(a)事例と同様、土浦中心市街地依存から荒川沖方面に分散していった。第25図にみられるように、1986年現在でも、月1回程度の土浦中心市街地の利用は変わらず、荒川沖の利用がみられなくなった。代わりに

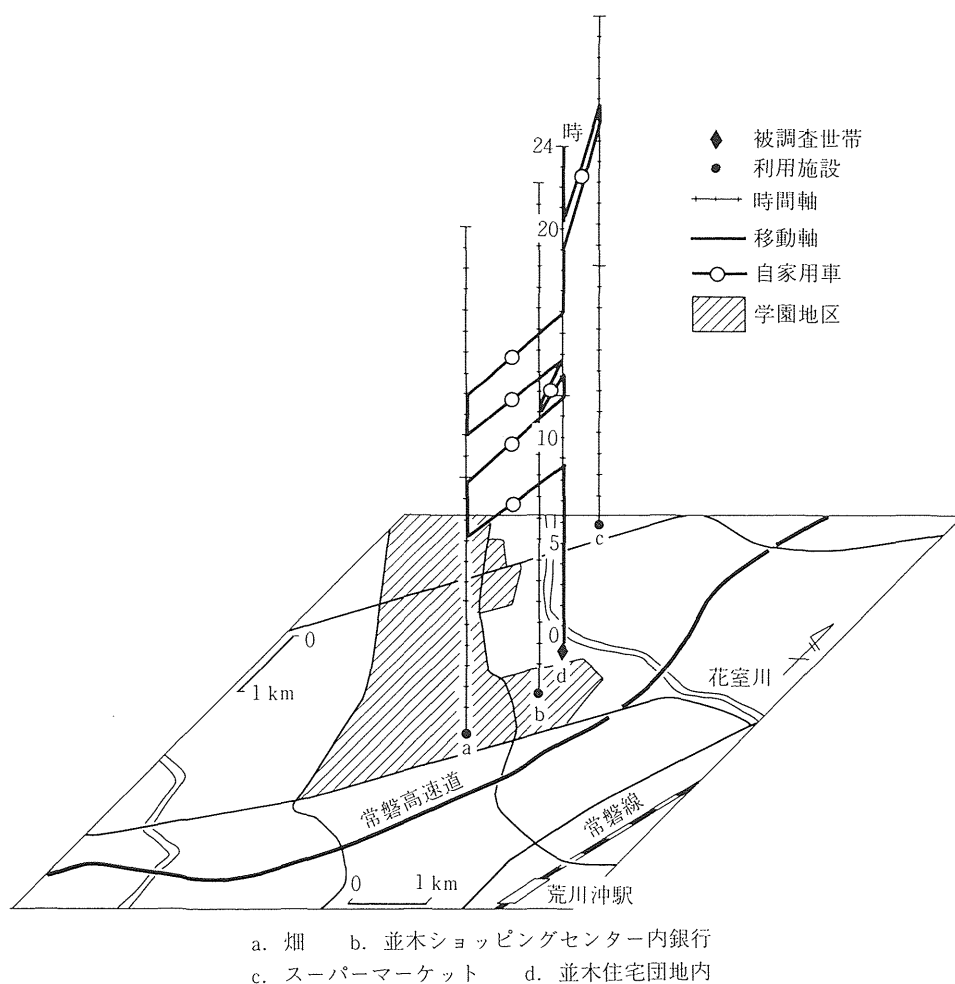
学園中心地区(c)を月に1回程度利用するようになった。ただし、老齢のIさんは荒川沖駅前(d)を利用している。これは沿線に位置する実家との結合関係によると考えられる。

b. 金融行動

上大角豆地区において、金融行動はあまり見られなかった。1976年当時の金融行動は既存集落内1.3kmの(c)を事例中1軒が利用していただけである(第26図)。この種の行動は従来男性の仕事であったという(I氏からの聞き取りによる)。1986年現在では既存集落内の(c)を変わずに利用している1軒の事例を除いて、並木地区と同様、並木ショッピングセンター(b)に集中している。利用目的は子供への送金である。移動手段は自家用車に依存している。

3) 収入労働行動

上大角豆地区の場合、収入労働は農業かそれ以外かに大別される。農業の場合には、行動者は田畑



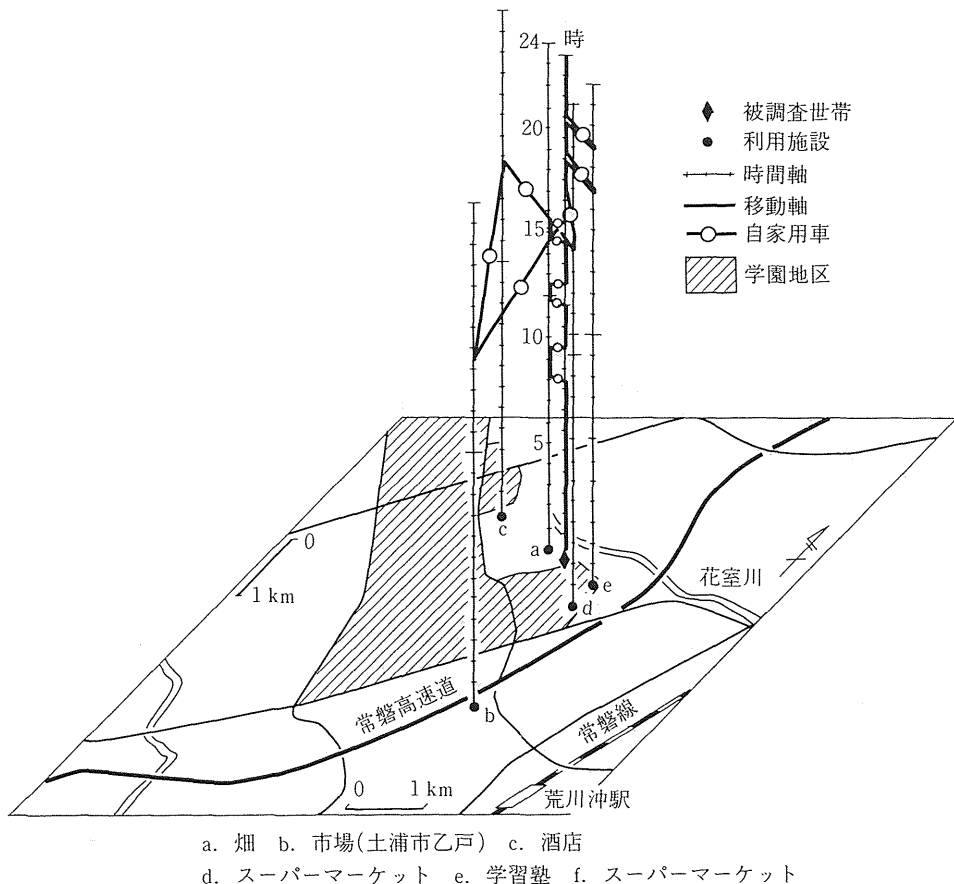
第34図 Fさん(穀物栽培者)の週日の生活行動
(1986年10月の聞き取りによる)

や市場などさまざまな場所を移動するが、その際滞留点となる場所はすべて選択される。まず、高齢のIさんの場合、収入労働行動はない。農業従事者の場合、居住地周辺の田畑に毎日出かけるが、半径3 km以内がほとんどであり、学園内にも畑(b)を所有している場合はそこへ出かけている。また、作付品目によっては毎日卸売市場(e)までの移動もみられる。農業に携わっていない場合は、近年、学園内(d)や土浦市などに在宅通勤するようになった。これは上大角豆地区全体の傾向で、農業収入の割合は低下を辿る一方である。しかし、勤務先が学園内や土浦市が多いということは、換言すれば、モータリゼーションによって職住近接が実現しているとも言えよう。また、核家族がほとんどである並木地区と異なり、上大角豆地区では複合家族が大多数であるため、子供の存在が収入労働行動を制約することはなく、昼間には高齢の母親に子供の面倒を任せて勤務するケースが多い。

4) 社会的・文化的行動

a. 社会的行動

上大角豆地区の場合、事例中においては学校教育関係の移動は1986年現在ではなかった。しかし、

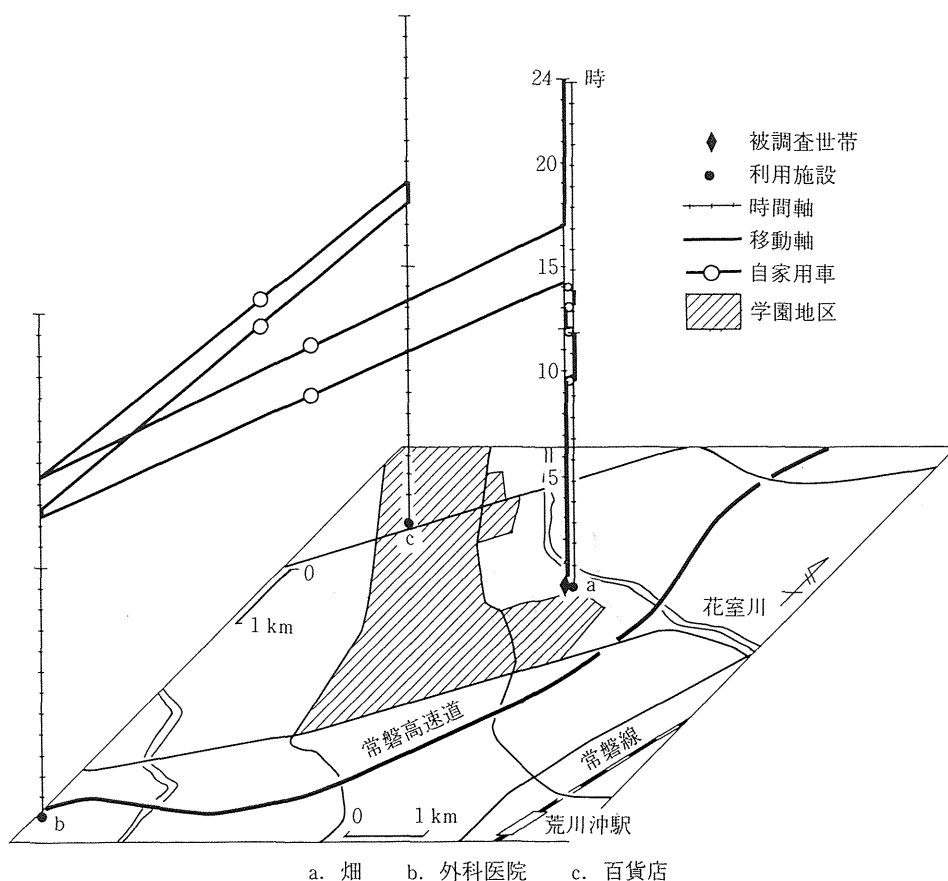


第35図 Gさん(近郊野菜栽培者)の週日の生活行動
(1986年10月の聞き取りによる)

Fさんによると、子供が並木中学校に在学している1981年頃には、PTA活動で並木中学校に月1回の割合で移動し、並木地区の主婦と類似の活動をしていたという。その他では、婦人会の会議が集落内の研修センターにおいて年に3回程度あった(第31図)。これは婦人会の役員の改選などに伴う会議で、時間は19時から2時間半ほどであった。この会議はむしろ親睦会的な性格が強い。また、農業に携わるGさんは農協婦人部に所属している。上大角豆地区では4人が所属しており、3か月に1回、圏民センター(e)へ自家用車で移動し、ほぼ9～14時まで活動を行なう。

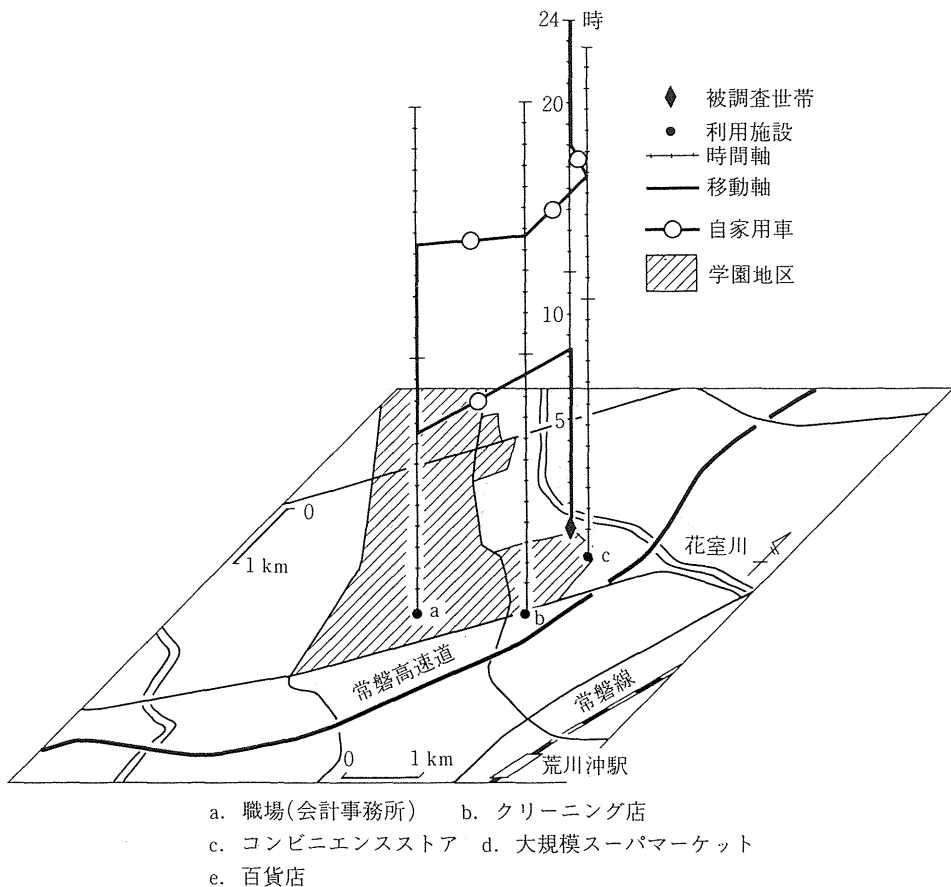
b. 文化的行動

第32図にみられるように、上大角豆地区の文化的行動は、通勤しているHさん、農業に携わっているFさん、Gさん、高齢のIさんと大きく3つに分類された。まず、Hさんは聞き取りの時点では出産前でこの種の行動は行なっていなかったが、1985年から1年間、学園中心地区の百貨店(b)に週1回勤務時間終了後の18時から20時まで趣味の教室に通っていた他、1983～1984年には並木地区内スポーツクラブに水曜日または木曜日に18時から19時30分までテニス教室とエアロビクス教室に通って



第36図 Gさん(近郊野菜栽培者)の週末の生活行動
(1986年10月の聞き取りによる)

いた。Fさん、Gさんの場合はまず、年1回の婦人会の旅行に出かけるという点で類似している。通常、農閑期に入る秋に1泊2日の旅行に出かける。移動手段はツアー参加での観光バスである。また、農閑期の1～3月頃までの間、栗原の西公民館で編物教室に通う点でも共通点があった。この編み物教室には桜村の既存集落の主婦が22～23人集まる。その他、並木地区内への移動もみられる。Fさんは、並木住宅内に居住するPTAの役員当時の知り合いの家に料理やアートフラワーを習いに行っていた。農協婦人部に所属するGさんは農協婦人部の旅行が年に1回あり、研修を兼ねて1泊2日で近隣の県に貸切りバスによって旅行する。1986年の場合は、7月の初めに奥鬼怒川方面に行った。高齢のIさんは老人会に所属し、毎月1日と15日に9～15時頃まで集落内の研修センターでの親睦会に参加する。また、毎月1回地藏講で研修センターに集まる。地藏講は婦人の信仰の集まりで安産を祈願し、お不動様の掛軸を下げて拝んだ後、当番の人が作った料理を食べ、懇談する。これは、老人会の行事ではないが、高齢者がいる場合には高齢者が参加する。その他にも、集落的行事がいくつかあるが、このような集落的活動は上大角豆地区内で完結するものであり、移動手段は徒歩が主体である。



第37図 Hさん(通勤者)の週日の生活行動
(1986年11月の聞き取りによる)

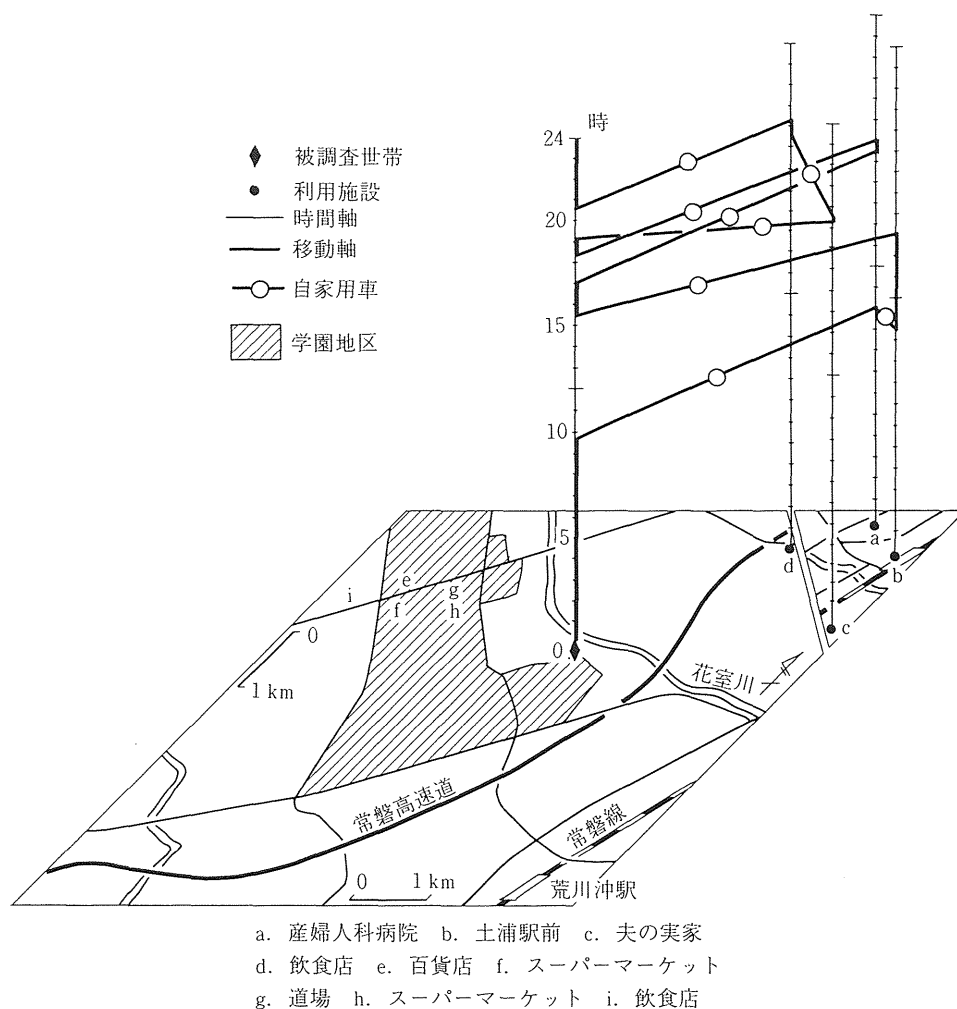
その他、家族での旅行はFさん、Gさんによると、子供が小さい頃は夏休みに近隣の県にキャンプに行ったりしたが、現在は子供も中学生になり、家族の旅行はないという。

Ⅲ-3 生活行動のリズム

並木地区と同様に、事例にあげた4人について、生活行動の現実の距離をなくし、行動目的別に時間経過をみたところ、第40図ようになった。本項では本図をもとに、週日・週末のリズムにおける行動目的を考察し、そこから第2節に示した行動目的ごとの行動圏と合わせて、週日・週末のリズムを明らかにする。また、年単位リズムにおいても考察を行なう。

1) 週日のリズム

高齢のIさんを除き、他の3人は共通して1日の大部分を収入労働行動に費やしている。通勤者と



第38図 Hさん(通勤者)の週末の生活行動
(1986年11月の聞き取りによる)

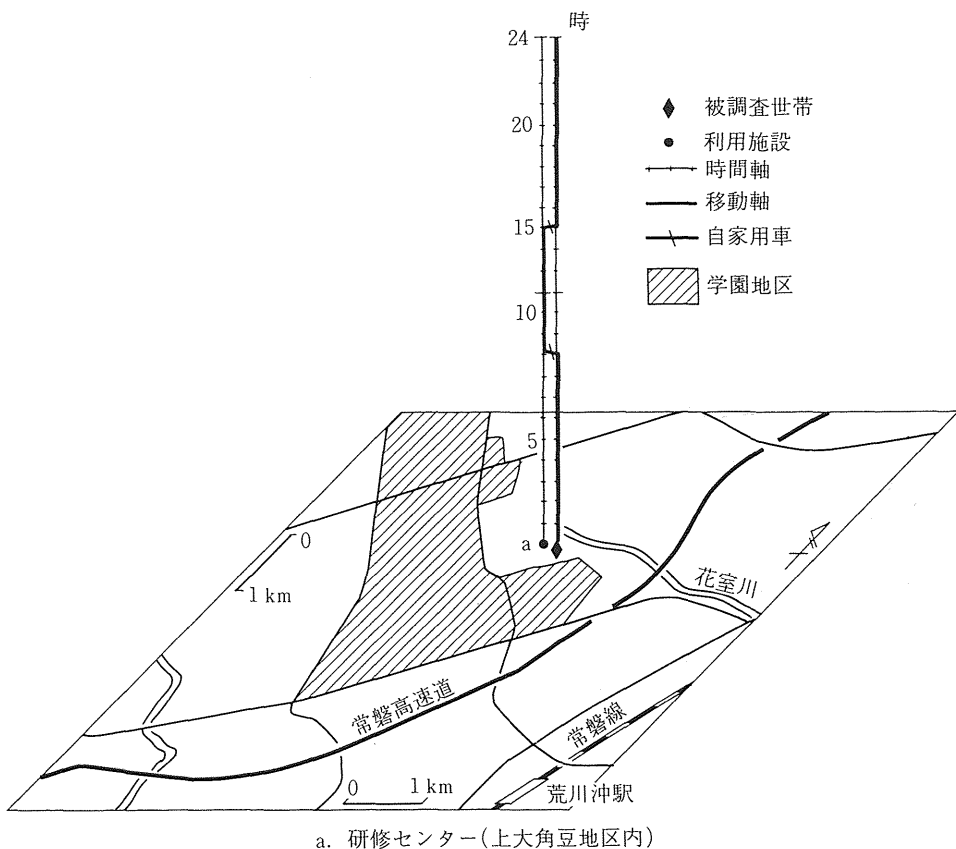
農業従事者では自宅との往復回数が異なるが、収入労働行動を日中に行ない、夕方、日常食料品の購入などの家事的行動を行なう点で共通性がある。しかし、野菜は自宅で栽培している場合が大半であり、まとめ買いによって週1回程度しか日常食料品を購入しない場合が多い。

従って、週日の行動圏は、第30図の収入労働行動、及び第23図の日常食料品購入圏に現れ、半径3.5km以内の桜村既存集落から土浦市まで及んでいる。

2) 週末のリズム

週末のリズムは、FさんからIさんに至るまで大きく異なる(第40図)。①の穀物栽培を主に行なうFさんの行動には、週末のリズムは認められない。それに対して、近郊野菜栽培を主に栽培し、市場への出荷が重要な収入労働行動であるGさんは、市場の開かない土曜日が週末リズムとして表れている。通勤者であるHさんは、職場が週休2日であるために明確に週末のリズムがある。高齢の主婦であるIさんには、週日・週末の区別がないことに特色がある。

週末のリズムが表れる場合は、その行動目的は週日の行動目的と比較して著しく異なる。つまり、Gさん及びHさんの場合は、衣料品等買い回り品の買物行動としての家事的生活动や、食事に出向

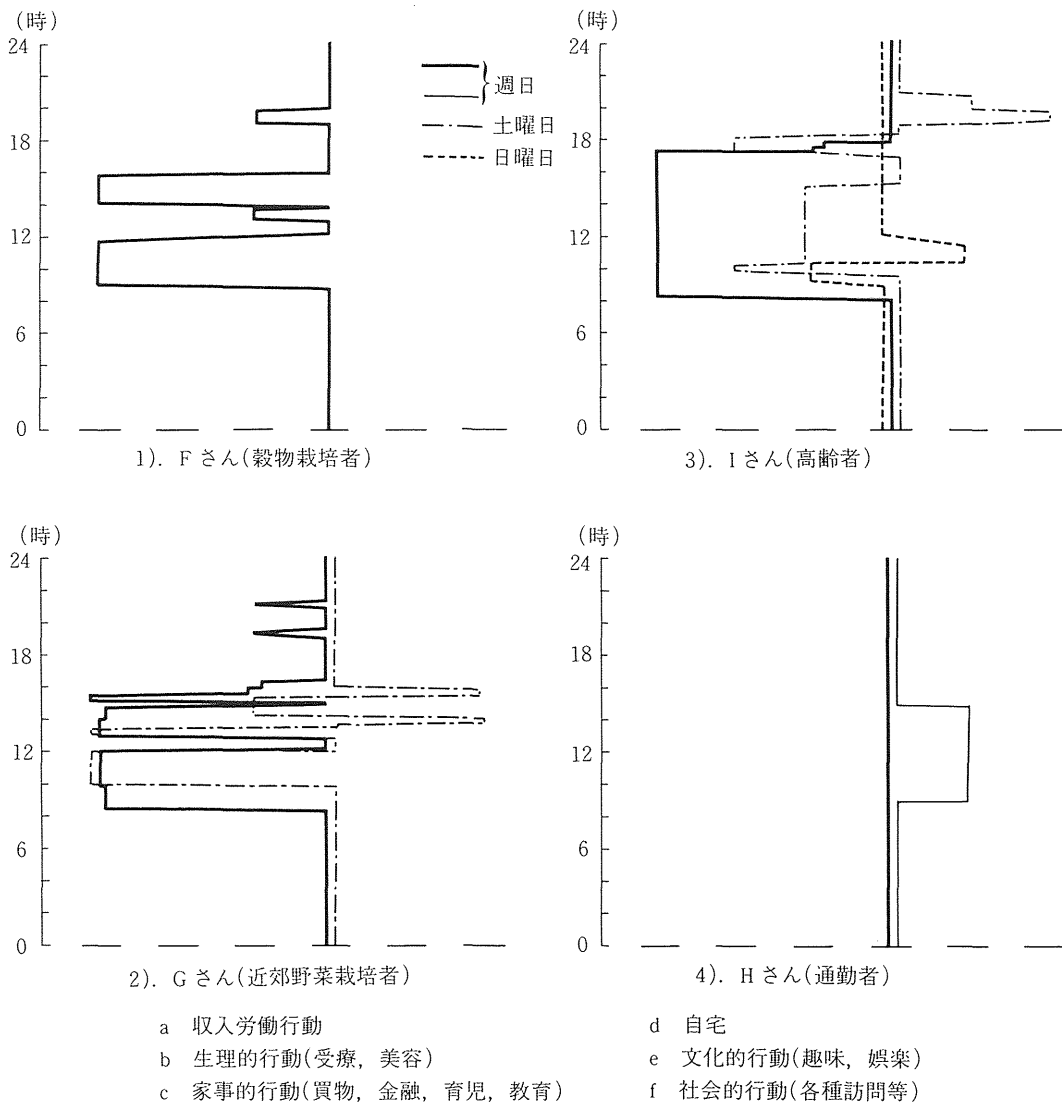


第39図 Iさん(高齢者)の週日の生活行動
(1986年10月の聞き取りによる)

くといった、余暇的活動が顕著となっている。また、見舞、訪問のような家族での社会的行動も出現している。

行動圏においても、その圏域は週日のそれと比較して大きく異なる。週末には、学園中心地区や、土浦中心市街地、荒川沖駅前へ買物や食事に出向くほか、近隣の筑波町や土浦市にある実家を訪問するような行動が出現する。移動単位は家族構成または子供の成長とともに変化する。これは他の地域の週末行動にも共通してみられる行動である。

しかし、上大角豆地区の週末の行動圏は、他の農村地域や地方小都市にみられた事例と比較した場合、その半径が2.5kmと小さい点に特色がある。これは古くから、農村という地域的特色を持ちながら、地方中規模都市である土浦市に直線距離で6.1kmと比較的近接していることに加え、隣接する学



第40図 上大角豆地区における主婦の生活行動の Category Space(1986年)

園都市の中心地区に1985年に大規模商業店舗が開店し、ほぼこの圏域で週末の行動が満たされるようになったためである。

3) 季節単位のリズム

ここで言う季節単位のリズムとは、季節に1回の移動を行なうという意味で用いる。上大角豆地区では、地区内に居住する婦人によって婦人会が組織されている。婦人会の会合は、各季節に1回上大角豆の研修センターで行なわれる。会議という意味で社会的であるが、内容は親睦的性格が強く、Fさん、Gさんの行動に共通的にみられた。

また、通勤者のHさんは、週末のリズムの他、連休や長い休暇を利用して2泊3日程度の季節単位の余暇行動を家族単位で行なう。その圏域は、茨城県内各地、及び近接の県と半径約150kmに及ぶ。

高齢のIさんは、土浦中心市街地及び荒川沖へ、嫁の車に同乗しての買物行動に表れた。

季節単位のリズムは、農業を営む場合、連休や長い休暇をそのまま余暇行動に当てるわけにはゆかず、遠距離の移動としては表れなかった。連休や長い休暇を、子供の休日とあわせてとれる通勤者の場合、半径約150km圏内の、連泊の余暇行動となって表れている。この場合も、自家用車による移動が顕著であった。

4) 年単位リズム

年単位リズムにおける行動圏は、半径100km以上の近隣の県から東南アジアなど国外の事例もみられた。この場合移動単位に関しては、通勤者は家族であるのに対して、農業従事者や高齢者は、それぞれ婦人会、老人会という地縁の組織が単位である点に特色がある。つまり年単位リズムは、同じ世帯に属しながらも高齢者は老人会で旅行し、若夫婦家族は家族または婦人会で旅行するという多層構造を持っている。また、これは子供の成長期に対応した変化ともいえる。つまり、鉾田町の事例でもみられたように、子供が成長するに応じて家族単位での移動から個人単位の移動、ここでは特に婦人会単位の移動となり、老人会単位の移動へ変化すると考えられる。

IV 並木地区と上大角豆地区における主婦の生活行動の特性

本章では、第Ⅱ章・第Ⅲ章に表れた生活行動空間を、時間地理学における制約の概念を導入して合理的解釈を試み、並木地区と上大角豆地区の主婦の行動特性を明らかにする。本研究で用いる制約の概念は、Hägerstrand (1970) により提唱されたもので、以下の3つである。

第1は能力の制約である。これは人間の生理的制約、移動に利用できる物理的能力などを意味する。本節では、高齢の主婦の体力という生理的側面、自転車や自動車といった移動手段の持つ物理的能力などがこれに相当する。

第2は結合の制約である。これは人が他人もしくはある事象と、ある場所あるいはある時間において結合することから生まれる制約をいう。本節では、労働時間内の勤務場所への拘束、子供の送迎、育児的活動、出荷活動などがこれに包含される。

第3は管理の制約である。これは、能力・結合の制約で可能とされた時空間範囲内の、ある特定領域(domain)に個人が接近することを制限する条件であり、規則や習慣、情報や地理的要件など

がこれにあたる。

Ⅳ－１ 各種生活行動からみた特性

まず、受療行動に着目する。受療行動は、原則として週日中に行なわなければならないという管理の制約を受けている。また、医療機関で受療するという結合の制約もある。さらに、週日の行動であるために、並木地区では、能力の制約も受けている。一般に行動を起こす際には、最近接施設が制約の範囲内にあることが条件となる。

1976年当時の並木地区における歯科受療に関しては、最近接施設が土浦市内であったために、週日の移動可能時間内では行動できなかった。それに対して上大角豆地区においては、週日の自家用車の利用が可能であったために、歯科受療行動はほとんど土浦市内に集中していた。

また、1976年当時の並木地区における内科受療は、最近接施設が直線距離で1.6kmの既存地区内にあったにもかかわらず、2.2km離れた並木地区に集中していた。これは、週日の並木地区における最も能力の高い移動手段が、自転車及びバスであり、既存集落内の道路網が自転車による移動に適さなかったことと、路線バスの利用が不便だったためである。それに対して、竹園地区へは、当時すでにペDESTリアンデッキという歩行者・自転車専用道路が整備されていたことと、バス路線の利用が容易であったことから、竹園地区が既存地区に比べて近接性が高かったと考えられる。

1986年における受療行動に関しては、並木地区の主婦は、並木地区内もしくはその近隣の研究機関内や梅園地区といった最近接施設を集中して利用している。それに対して、上大角豆地区の主婦は、最近接施設である並木ショッピングセンター内及び、研究機関内施設は利用せず、既存集落内周辺の施設を利用する傾向がある。つまり、並木地区が半径1～1.5km以内で完結する受療行動がほとんどであるのに対し、上大角豆地区では、半径1.5～2kmと並木地区より広範囲で受療行動が行なわれていた。

以上により、並木地区においては自家用車の所有台数はほとんどの世帯が1台であり、週日には夫が通勤に利用する。主婦が自家用車を週日利用できないことは、能力の制約であると考えられる。それに対して上大角豆では、各世帯で少なくとも2台の自家用車を所有し、週日・週末の区別なく自家用車を移動の手段とできる点で並木地区より能力の制約が少ない。これらと同様な差異は、日常食料品などの買物行動及び金融行動に見られた。

次に、美容行動に着目する。1976年当時の並木地区における美容行動は、最近接施設が周辺の既存集落内にあったにもかかわらず、土浦市へ依存していた。週日における土浦市への移動はバスに依存せねばならなかったが、美容行動には情報の存在という管理の制約が働き、並木地区の主婦を土浦市に向かわせたと考えられる。これは、衣料品買物行動にみられた土浦市への指向と結合して、土浦市が学園都市に対して商業・サービス機能を提供していたと考えられる。それに対して上大角豆地区の主婦の美容行動は、既存地区内の1施設集中が1976年においても1986年においても変化せず、地縁的な結合が見られる。しかし通勤者は、土浦市依存から学園地区依存へと、並木地区とまったく同様な傾向を示した。つまり、美容行動は、農業という労働形態が、余暇と完全に分離していないという結

合の制約に影響を受けているためと考えられた。

次に、収入労働行動を考察する。収入労働行動は、並木地区では東京への移動もみられたが、半径 1.8km 以内の近隣ではほぼ完結する。上大角豆地区においては農地が分散しているため、行動範囲は半径 3 km に広がるが、2 地区ともに職住近接が実現していると思われる。しかし、並木地区では時間給勤務がほとんどで、恒常的勤務をするには東京などへの遠距離通勤を余儀なくされており、学園都市内には、恒常的な就業の機会が不足している。それに対して上大角豆地区では、学園都市建設後、学園都市内や土浦市などに恒常的に勤務する傾向にあり、安定的な農外就業機会が増加している。

以上にみられた収入労働行動における学園都市の各々の地区に及ぼす機能の違いは、居住地区の成立要因の差異から生ずる制約条件の違いによると考えられる。まず、農村的な生活形態を維持してきた上大角豆地区では複合家族がほとんどで、両親に子供の世話を任せられるため、子供による結合の制約が極めて小さい。それに対して、並木地区は公務員住宅に居住する核家族が大半で、育児的活動による結合の制約は大きい。子供による結合の制約、つまり育児的活動に要する時間と労働行動との関係を明らかにしている事例研究として Pred and Palm (1978) の研究がある。これによると、小さな子供を有する核家族の主婦の労働行動は、子供の保育施設への移動によって制約を受ける。また、Tivers, J (1985) は保育施設の整備と労働行動との関係について論じ、イギリス郊外においては保育施設整備の未発達が労働行動を妨げているとしている。しかし、並木地区においては半径 1 km 以内に幼稚園 2 施設及び児童館 1 施設があり、保育施設による制約は比較的小さい。Palm, R (1981) によると、採鉱や建設業が地方の中心的産業であるコロラド州の小都市において、専門分野を持つ女性は、地方の恒常的産業に就業するのを拒否するため、就業機会が得にくいことを明らかにしている。この視点において学園都市をみた場合、学園都市には国立の教育研究機関が集積し、恒常的なその他の就業機会、事務職・一般職に限られている。従って、専門分野を持つ女性の多い学園地区では、その就業機会をより小さいものにしていると考えられる。

このような並木地区における主婦の就業形態は、週日の日中に移動可能時間を生み出し、上大角豆地区においては、週日は勤務場所による結合の制約により、日中の移動可能時間は極めて短い。そのため、並木地区においては、文化的活動が盛んに行なわれる一方、上大角豆地区では文化的活動はみられない。これは、文化的活動は選択によって生まれるのではなく就業機会による制約から生まれるとした Palm (1981) の研究においても指摘されており、学園都市においても同様のことがいえよう。しかし並木地区においては、制約を補うように公民館や集会所、公園施設という計画的に配置された限られた都市施設を利用して主婦独自の Coupling 空間を作り出している。また、習い事の講師もやはり学園内の主婦であることが多い。これも学園都市の特色であると言えよう。

IV-2 生活行動のリズムからみた特性

本節においては、並木・上大角豆両地区の週日・週末・年単位のリズムからみた主婦の生活行動の特性について述べる。

まず週日のリズムに着目する。並木地区においては、子供の年齢とともに生活行動は分化するとい

える。すなわち、育児的活動から生じる結合の制約は、子供が成長し、帰宅時間が遅くなるに従って縮小し、代わって移動可能時間の制約が出現してくる。しかし、移動範囲は、ほぼ並木地区内及びその周辺の半径1.6km 以内で完結し、乳児を持つ主婦から幼稚園児を持つ主婦で飛躍の拡大をみせた以外は、移動可能時間が増加しても行動圏は拡大しなかった。そのかわりに、移動可能時間の増加に伴って、趣味の習い事やサークルといった文化的活動を限られた公共施設で行なったり、収入労働行動を始めるといった移動先での滞留時間の延長が顕著に現れた。

それに対して上大角豆地区においては、育児的活動による結合の制約はみられず、1日の大部分を収入労働行動に費すという点で、並木地区と大きく異なっていた。行動圏は収入労働行動の場所にも左右されるが、既存地区、土浦市及び学園地区にまで及ぶ半径3.5km 以内という比較的広範囲にわたる点においても並木地区と異なる。また、高橋ほか(1984)による鉾田町の事例研究で指摘したように、週日においては収入労働行動より日常買物行動による移動の方が広範囲に及ぶことが、上大角豆地区でも明らかとなった。これは、農村の自給的経済の維持により、買物は自家用車を利用して週1・2回程度のまとめ買いを行なうため、能力の制約の範囲内で選択できる店舗が多いと考えられた。

なお高齢者においては2地区に共通して、移動時間、移動範囲ともに狭小であることが共通していたが、並木地区においては、サークルという文化的活動のための機能的結合による移動が主だったのに対し、上大角豆地区では、地縁的な結合による移動が主であったことに大きな差異が生じている。

並木地区の主婦は、移転の際、前住地でのコミュニティ空間をまったく断ち切らなくてはならなかった。そのような特異で孤立した生活空間も、高齢者で見られたように、サークルという文化的活動による結合、換言すれば機能的結合によって上大角豆地区で見られる地縁的な結合に置き換えているといえる。

次に、週末のリズムに着目する。週末のリズムは並木地区において、より明確に現れた。上大角豆地区では農業従事者の場合、市場などに毎日移動しない穀物栽培者に関しては明確な週日と週末のリズムの差は特に生じなかった。高齢者については、両地区とも共通して週末もほとんど移動が現れなかった。

週末の行動が現れる場合は、両地区に共通して学園中心地区への移動が顕著に見られた。移動単位は、週日に対してどちらも親子・家族といった単位に変化していた。移動手段は両地区とも自家用車を中心であった。

また並木・上大角豆両地区とも、子供が幼稚園から小学校低学年の時期は、家族での県内もしくは近隣県への日帰りの余暇行動が認められた。これは、高橋ほか(1984)の研究における鉾田町の事例でも見られた余暇行動であり、特定地域に限らず、子供が成長する段階でみられる家族依存期の余暇形態といえる。ただし鉾田町においては、子供が中学校低学年頃までこの傾向がみられたのに対し、本研究では両地区とも小学校低学年頃までであった。これは、子供が当時期から週末もスポーツクラブに通うような社会的活動を行なうようになったためと、学園都市の公共施設が整備されていることと関連すると考えられる。

最後に年単位リズムに着目する。並木地区においては、家族単位での帰省行動に共通して遠距離の

移動が認められた。それに対して上大角豆地区では、家族での帰省行動は見られず、そのかわりに、若い家族において遠距離への余暇活動が見られた他、婦人会、老人会という地縁的結合単位での、世代ごとの二重、三重の余暇行動が現れた。

この相違が、居住地区の持つ性格を表していることは言うまでもない。並木地区では、年末・年始といった1年の節目に生活行動空間を遠距離に移すのに対し、上大角豆地区ではその様な節目は、他地域から親戚が来訪し、生活行動空間は原則として変化しない。その代わりに、集落の基本的構造である農業経営の季節的变化、つまり農繁期から農閑期に移るにつれて、家族構成員のうち同じ世代が集まって、それぞれ別の余暇行動を行なう。これらは、田畑での労働から離れられないという農村独特の結合の制約から生み出された余暇形態といえる。従って現在進行している兼業化により、今後上大角豆地区が集落の持つ農業的基盤を消失すれば、このような農村独特の年単位リズムも消え、生活行動は都市型に移行していくものと考えられる。

V 結 論

以上の考察により、並木地区及び上大角豆地区における主婦の生活行動には以下のような差異があることが明らかになった。

並木地区における主婦は、並木地区及びその周辺における学園地区内の極めて近隣に完結する生活行動空間を示した。その際の生活行動は育兒的活動による結合の制約を強く受けていた。育兒に要する時間が、週日中少なくなるにつれて、並木地区内またはその周辺で定期的な活動を行なうという傾向がみられた。移動先も限られた公共施設に集中するという、空間の同配置が顕著であった。

それに対し、上大角豆地区の主婦は、収入労働行動を週日の恒常的活動として行ない、既存地区内を基本的生活空間としながらも、学園地区の施設を並木地区より広範囲にわたって選択して利用し、生活空間に取り入れる傾向が見られた。

そしてこのような並木・上大角豆地区での生活行動の差異をもたらす要因をも明らかにすることができた。第1に、居住地区に成立要因の違いが大きな影響を及ぼしていることがわかった。並木地区は、学園都市に移転・新設された国立研究機関の公務員を居住させる人口集中地区として、計画的に建設された地区である。そのため並木地区の主婦は、夫の勤務先の移転にともない、自らは就業的基盤を持たずに当地に居住し始めた。そして本研究でも明らかになったように、核家族のために子供が小さい場合には育兒的活動が生活の中核になることや、現在の就業機会においても学園都市内及びその周辺の恒常的な就業機会を、専門的分野を持つ主婦が多いためにより少なくさせている。以上が並木地区の主婦の生活行動と上大角豆地区の主婦の生活行動とが大きく異なることの要因として明らかになった。それに対し上大角豆地区は、古くから農業を生活基盤としていた。従って主婦は、農作業を行なうことが必然的に要求されてきた。従って労働行動は、地縁的に必然性を持っていない並木地区と大きく異なる要因として明らかになった。

しかし並木地区は、このような労働行動の少なさを、学園都市に存在する限られた公共施設や公園を用いて文化的活動を盛んに行うことで学園都市内に独自の coupling 空間を生み出しているといえ

る。

第2は、学園地区内に整備されたペDESTリアンデッキとその沿線の計画的に配置された施設の機能があげられる。上大角豆地区では、移動手段が自家用車であり、行動を限定する制約が小さいのに対し、週日の移動手段を自転車に依存する並木地区の主婦にとって、ペDESTリアンデッキの存在は安全で移動しやすい生活道路として重要な役割を果たす。さらに、ペDESTリアンデッキの沿線には計画的に並木ショッピングセンター、並木公民館などの生活に必要な最小限度の施設と、数多くの公園が機能的に配置されている。1976年当時には、これらの施設の整備が不完全で、基本的な生活さえも遠距離の既存都市施設に依存しなければならなかった。しかし、1986年現在においては、これらの必要最低限の施設は並木地区内ではほぼ機能するようになった。従って、並木地区での生活が完結するように変化した点では、計画された施設配置の成果ともいえよう。しかし、極めて限られた地区に、極めて限られた業種しか立地できないという土地利用の法的規制により、その計画施設は他の地域にみられる商店街のように面的または線的な広がりを見せず、散在する施設の点的利用を見せているに過ぎない。これが、並木地区における1施設への集中、つまり空間の同配置を生み出す要因となっている。

しかし、限られた施設への移動も、整理地区内に民間の施設が少ないながらも増加するに応じて、それらへの選択の幅が広がりつつある。このような施設へは、並木地区、上大角豆地区に共通する行動がみられる。つまり、当整理地区は、既存地区と学園地区の接点になっている。それはまた、旧来の農村景観や農村における生活行動をも変化させつつある要因となっている。

旧来からの所有地であった学園都市内の田畑、その他が都市的土地利用への要求度が高まることによって次第に都市的施設にその様相を変え、農業の地位は低下し、またそのような施設の増加に伴い、農村部の住民にとっては、近隣に著しく雇用機会が増大したことにより、生活行動そのものが学園都市内へ移行するという一連の生活行動空間を生み出している。

さらに、学園都市中心地区は、業務・商業中心地区としての機能が計画されているが、そのうち、大規模スーパーマーケットや百貨店が進出し、商業的機能を果たし始めた。この商業中心地としての機能は、大規模駐車場の存在により、自動車に移動手段を依存する当地域にとって、既存地区をも吸収して、1976年当時は商業中心地であった土浦市よりも、商業中心地としての機能を高めつつある。

このように学園都市は、他地域から独立した完結的な生活行動空間を形成しつつ、既存地区の生活行動空間をも包摂し始めた。地方中心都市土浦市の郊外に位置した学園都市は、まだ日常生活行動においては限られた機能しか持たないが、次第に既存地区をも取り込んで中心的機能を高めつつある。

謝 辞

現地調査及び資料収集に際しては、旧桜村教育委員会社会教育課をはじめとして、旧桜村役場、旧桜村公民館の方々、並木地区・上大角豆地区在住の方々に大変なご援助をいただいた。製図は宮坂和人・小崎四郎両氏へ、また、写真撮影は筑波大学大学院の堤 純君に依頼した。以上、記してお礼を申し上げます。

注

- 1) 筑波研究学園都市建設法（『法律第73号』1970年5月19日成立，1974年6月26日改正による）
- 2) 資料：住宅・都市整備公団研究学園都市開発局編（1985）：『生きつづける民家』.
- 3) 前掲1)より，「研究学園地区」とは，移転または新設する機関の施設及び1団地の住民施設を整備すべき区域であって，政令で定めるものをいう．それに対し，「周辺開発地区」は，筑波研究学園都市の地域のうち，研究学園地区以外の地区をいうと定義されている．
- 4) 前掲3).
- 5) 前掲2).
- 6) 山下雄三（1981）：筑波研究学園都市の形成と農業の振興に関する研究．国際科学振興財団：『新都市と田園都市構想に関して』.
- 7) 旧桜村住民課の資料による．
- 8) 1985年農林業センサス．
- 9) 前掲8).
- 10) 前掲2).
- 11) 前掲7).
- 12) 歩行者・自転車専用道路をいう．

参考文献

- 高橋伸夫・高林清和（1978）：浜松市における余暇圏の構造．人文地理学研究，**2**，95～108.
- 高橋伸夫・市南文一（1981）：出島村における生活行動に関する地理学的研究．霞ヶ浦地域調査報告，**3**，57～76.
- 高橋伸夫・市南文一・伊藤 悟（1982）：出島村における生活行動に関する地理学的研究—続報—．霞ヶ浦地域調査報告，**4**，53～62.
- 神谷浩夫（1984）：消費者空間選択の一考察—制約を導入した店舗選択の分析—．地理学評論，**57**，413～426.
- 伊藤セツ・天野寛子・森ますみ・大竹美登利（1984）：『生活空間』，40～49.
- 若林芳樹（1984）：広島都市圏住民の日常的空間行動パターン—多目的行動を中心として—．人文地理，**36**，111～130.
- 高橋伸夫・井田仁康・A. サマルカンディ（1984）：鉢田町における住民の行動圏．地域調査報告，**6**，105～117.
- 櫛谷圭司（1985）：時間地理学の動向．人文地理，**37**，533～551.
- 櫛谷圭司（1985）：時間地理学（time-geography）の内房漁師の行動解釈への応用．地理学評論，**58**，645～662.
- 神谷浩夫（1987）：名古屋市における主婦の日常行動—時間利用と外出行動との関連を中心に—．人文地理，**39**，505～521.
- 高橋伸夫（1987）：日本の生活空間にみられる時空間行動に関する一考察．人文地理，**39**，295～318.
- 荒井良雄・川口太郎・岡本耕平・神谷浩夫編訳（1989）：『生活の空間 都市の空間』，247p.
- 杉浦芳夫（1989）：『地理学講座 5 立地と空間的行動』，207p.
- 神谷浩夫・岡本耕平・荒井良雄・川口太郎（1990）：長野県下諏訪町における既婚女性の就業に関する時間地理学的分析．地理学評論，**63**，766～783.
- 高橋伸夫編（1990）：『日本の生活空間』，259p.
- 川口太郎・神谷浩夫（1991）：都市における生活行動研究の視点，人文地理，**43**，348～367.
- 川口太郎（1992）：郊外地域における生活行動圏に関する考察．地域学研究，**5**，83～99.
- Hägerstrand, T. (1970) : What about people in regional science?. *Papers of the Regional Science Association*, **24**, 7～21.
- Pred, A. (1977) : The chreography of existence : comments on Hägerstrand's time geography and its usefulness. *Econ. Geogr.*, **53**, 207～221.
- Thrift, N. (1977) : An introduction to time-geography. *Concepts and Techniques in Modern Geography*, Geo Abstract, London, 36p.
- Pred, A. and Palm, R. (1978) : The status of American Women. Lanegran, D.A. and Palm R. : *An invitation to geography*. Macgraw-hill book company. 99～109.
- Palm R. (1981) : Women in nonmetropolitan areas : a time-budget survey. *Environ. Plann. A.*, **13**, 373～378.
- Carlstein, T. (1982) : Time Resources. *Society and Ecology*, 38～64.
- Mazey, M.E. and Lee, D.R. (1983) : *Her Space Her Place-A Geography of Women*. 23～29.
- Forsstorm, A. (1984) : Methodological approach to

- the commuting accidents. *Geografiska Annaler*, **66B**, 59~70.
- Giddens, A. (1985) : Time, space and regionalization.
- Gregory, D. and Urry, J. eds. : *Social relation and spatial structure*, Macmillan, London, 265~595.
- Tivers, J. (1985) : *Women attached: the daily lives of women with young children*. Croom Helm, London, 357p.
- Walmsley, D. J. (1988) : *Urban Living*, Longman Scientific & Technical, New York, 204p.

The Activity Patterns of Mistresses in Tsukuba Science City

— As a Case in Namiki and Kamisasagi —

Nobuo TAKAHASHI and Rie NAKAMURA

As long as a man lead a life, a man exists in space and time. It is important to realize that just as we use space and time as resources, allocating particular portions to particular uses.

In this paper, the authors applied to understand mistresses' time-space behavior, using Hägerstrand's time-geographic approach. And tried to realised the relation of substantively phenomena in both new and old place of Tsukuba science city.

This paper brings up some mistresses' daily behaviors in Namiki and Kamisasagi district. Their attributes were examined by hearing.

Analyzing the data, this article could realised the following results:

1) Mistresses in Namiki act within narrower limits than those in Kamisasagi do. The former usually uses space only about in Namiki-district and nearby it. Moreover, it can be seen an organization of co-ordinations in space, "syn-chronization" (Charlstein, 1982). The latter usually uses space in convenient for driving.

2) The daily movements on weekdays of mistresses' in Namiki district are influenced by the Coupling constraints (Hägerstrand, 1970) for their children. With reducing the time needed for child-care, they have more fixed time, such as working and hobby. Against them, mistresses in Kamisasagi district have a similar rhythms. They use almost all a day for works on week days.

These differences produced by following factors.

i) The first factor is the difference of the forming process between two districts. At the start, mistresses in Namiki hardly have bases for work. Against that, Kamisasagi have been agricultural district since long ago. So, working is the basic function for daily life for mistresses in Kamisasagi.

ii) The second factor is the existence of the pedestrian mall and various facilities on it. The pedestrian mall takes an important part for mistresses to move because of their lack of mobility. But facilities are limited on condition of location in 'City' area, so movements in Namiki centered round some points.



写真1 研究対象地域(1989年1月国土地理院撮影)

写真右上に大上角豆集落, 左手に並木住宅団地が位置する。



写真2 つくば市都心地区
(1993年1月撮影, 写真3 以下も
同じ)

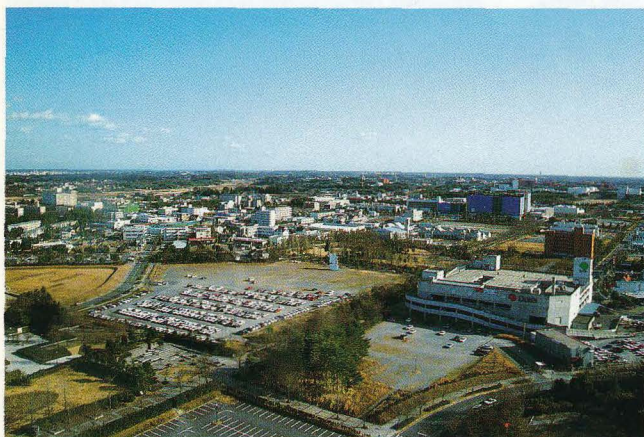


写真3 つくば市都心地区



写真4 つくば市都心地区の大型商業店舗



写真5 つくば市並木ショッピングセンター



写真6 つくば市並木住宅団地



写真7 つくば市並木住宅団地

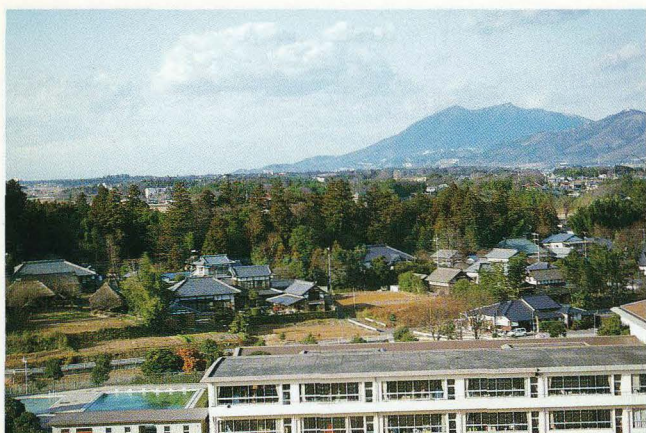


写真8 つくば市上大角豆集落
(中央部：上大角豆集落，手前：
並木小学校)



写真9 つくば市並木公民館



写真10 つくば市上大角豆集落



写真11 つくば市上大角豆集落の民家



写真12 つくば市上大角豆集落の民家



写真13 つくば市上大角豆集落